

# カマラシーラの無自性論証 と ダルマキールティの因果論

—*Sarvadharmaniḥsvabhāvasiddhi* の和訳研究(3)—

森 山 清 徹

## 目 次

略 号

序

第一部 Kamalaśīla の Dharmakīrti 批判

総 論

I. Kamalaśīla の Dharmakīrti 批判(1)

——直接知覚 (pratyakṣa) による因果論検証——

II. Kamalaśīla の Dharmakīrti 批判(2)

——推理 (anumāna) による因果論検証——

III. Kamalaśīla の Dharmakīrti, Śākyabuddhi 批判(3)

——推理による無二知 (advayañāna) の論難——

IV. Kamalaśīla の Dharmakīrti 批判(4) : SDNS 和訳研究(3)の解説

——知の自己照明 (prakāśa) 説論破——

結 論

第二部 SDNS の和訳研究(3)

I. 梗 概

II. 和 訳

III. テ キ ス ト

略 号

BhK I: *Bhāvanākrama* of Kamalaśīla, Minor Buddhist Text part  
I & II, ed. by G. Tucci 1978. Rinsen Book Company.  
Kyoto.

C: The Co ne edition, USA, LASWR.

- D: The sDe dge edition, preserved at the Faculty of Letters, University of Tokyo.
- Ichigō: *Madhyamakālaṅkāra*. Kyoto 1985.
- Māl: *Madhyamakāloka* of Kamalaśīla, P. No. 5287. Vol. 101. Sa143b<sup>2</sup>-275a<sup>5</sup>, D. No. 3887. Sa133b<sup>4</sup>-244a<sup>7</sup>.
- MMK: *Madhyamakakārikā* of Nāgārjuna. See Prasp.
- N: The sNar than' edition.
- NB, NBṬ: *Nyāyabindu*. Durvekamiśra's *Dharmottarapradīpa*, Tibetan Sanskrit Works Series. Vol. II. 1971.
- om.: The edition omits the letter or the word.
- P: The Peking edition; The Tibetan Tripiṭaka, ed. by Daisetz Suzuki, Tokyo-Kyoto. 1954-1963.
- Part I, III.: Seitetsu Moriyama, The Yogācāra-Mādhyamika Refutation of the Portion of the Satyākāra and Alikākāra-vādins of the Yogācāra School, Part I (仏教大学大学院研究紀要, 第12号, 1984.3.) pp. 1-58. Part III (人文学論集, 第18号, 1984.12.) pp. 1-28.
- Prasp: *Prasannapadā* of Candrakīrti, ed. by Louis de la Vallée Poussin, Bibliotheca Buddhica. IV. Meicho-Fukyū-kai, 1977.
- PV: *Pramāṇavārttika* of Dharmakīrti.
- PVin: Dharmakīrti's *Pramāṇaviniścayaḥ*, ed. by T. Vetter. I. Kapitel: Pratyakṣam. Einleitung, Text der tibetischen Übersetzung, Sanskritfragmente, deutsche Übersetzung, Österreichische Akademie der Wissenschaften, Wien 1966.
- PVP: *Pramāṇavārttikapañjikā* of Devendrabuddhi, P. Vol. 130. No. 5717. D. No. 4217 Che 1b<sup>1</sup>-326b<sup>4</sup>
- PV-sv: *Pramāṇavārttikam* of Dharmakīrti, the First chapter with the Autocommentary, ed. by Raniero Gnoli, Serie Orientale Roma, XXIII, 1960.
- PVT(Ś): *Pramāṇavārttika-tīkā* of Śākyabuddhi, P. Vol. 131. No. 5718. D. No. 4220. Je 1b<sup>1</sup>-328a<sup>7</sup> Ne 1b<sup>1</sup>-282a<sup>7</sup>.
- SDNS (1) (2): 森山清徹, カマラシーラの *Sarvadharmanihṣvabhāvasiddhi*

- の和訳研究(1)(2) (仏教大学大学院研究紀要, 第9号, 1981.3, 第10号, 1982.3)
- SDNS IV: Seitetsu Moriyama An Annotated Translation of Kamalaśīla's *Sarvadharmāṅṅsvabhāvasiddhi* Part IV (仏教大学研究紀要通巻69号, pp. 36-86)
- SDP: *Satyadvayaṅṅapaṅṅikā* of Śāntarakṣita (D. No. 3883, P. No. 5283)
- SDV: *Satyadvayaṅṅavṅṅrtti* of Jñānagarbha (D. No. 3882)
- TS, TSP: *Tattvasaṅṅraha* of Śāntarakṣita, *-paṅṅikā* of Kamalaśīla, ed by S. D. Shastri.
- 戸崎(上)(下): 戸崎宏正『仏教認識論の研究』上巻, 下巻, 大東出版社, 1979, 1985。

## 序

Kamalaśīla の *Sarvadharmāṅṅsvabhāvasiddhi* (SDNS) 及び *Madhyamakāloka* (Māl) は, 論理 (Yukti) と聖教 (Āgama) によって一切法無自性を証明しようとする独立した著述である。後者は前者の約五倍の分量を有し, より詳細なものである。また, 前者と後者の大部分は逐字的に一致し, 両書を対照しながら読解を進めることは不可欠な要因である<sup>(2)</sup>。今回, SDNS の論理 (Yukti) による証明の最終部分の訳文とチベット語テキストを發表するに際し, その全体を含め, Kamalaśīla の「一切法無自性成就」の基軸となる視点を考究しておかなければならない必要上, Dharmakīrti 批判と題し, 論考を前半において著しておく。つまり Kamalaśīla の論理 (Yukti) による「無自性論証」の構造は, 因 (hetu) による生起の論破及び縁 (pratyaya) からの生起を主張する見解の論破からなり, それは, Nāgārjuna の『中論』第一章をモデルにしているものであることが知られる<sup>(3)</sup>。今回の訳文とテキストは, SDNSの和訳研究(1),(2)に継続する部分であり, 内容的には「縁 (pratyaya) からの生起」

(1) Seitetsu Moriyama: A Synopsis of the *Sarvadharmāṅṅsvabhāvasiddhi* of Kamalaśīla (1) 印度学仏教研究, Vol. XXX No.2, 1982年3月, pp. 1035-1031.

(2) SDNS (1), (2), IV. fn. に Māl との identity を示している。

(3) cf. 第一部 IV.

を主張する見解を破するものである。そこで Kamalaśīla が論破の対象として取り挙げている見解とは、Dharmakīrti の知の自己照明 (prakāśa) [=自己認識 (svasamvedana)] の理論であると筆者は考え、分析を試みた<sup>(4)</sup>。この知の自己照明 (prakāśa) 説を含め、Kamalaśīla が SDNS の論理 (Yukti) による吟味の部分で、そして Māl のそれに対応する部分及び関連する部分で、論破の対象としているのは、因果関係 (kāryakāraṇabhāva) の理論である。特に「因果関係は、直接知覚 (pratyakṣa) と非認識 (anupalabdhi) によって証明される<sup>(4a)</sup>」と提唱する Dharmakīrti の見解が直接狙上へのせられ、論難されている。その方法は、Dharmakīrti を始めとする仏教論理学派の検証方法を逆用し、つまり、直接知覚による検証、推理による検証、すなわち三種の能証 (hetu) ——結果 (kārya)、同一性 (svabhāva)、非認識 (anupalabdhi)——各々による吟味を通じて、さらには対論者 (仏教論理学派、直接的には Śākyabuddhi) の構成する推論式の不整合性を指摘することにより、因果関係の不成立を論じて行くものである。全体としては、因果関係を巡って、Dharmakīrti の諸理論が互いに並立し得ないことを指摘して行く。そして最終的には、因果関係は世俗として承認され得るものであるが、勝義としてではないと弁明し、一切法無自性の論証へと導くのである。

## 第一部 Kamalaśīla の Dharmakīrti 批判

### 総論 Kamalaśīla の無自性論証と Dharmakīrti の因果論と知識論

Kamalaśīla は論理 (Yukti) と聖教 (Āgama) によって一切法無自性を証明することを目的とする著、*Sarvadharmāṅśvabhāvasiddhi* (SDNS) 冒頭で、また *Madhyamakāloka* (Māl) で、次の推論式を提出する。

<sup>(5)</sup> およそ、最高の真実として、自から生じること、他から生じること、自他の

(4) cf. 第一部 IV.

(4a) cf. (9) (17) (18)

(5) SDNS (1) p. 62<sup>11-20</sup> 及び、同、fn. (5) Māl P208a<sup>6-7</sup>, D190<sup>3-4</sup>

二から生じること、無因から生じること、を離れているものは全て、真実として、自性をもたないものである。例えば虚空に咲く蓮などのように。(必然性)

自学派(仏教徒)と他学派(異教徒)の人々が語るこれらのものも、以上の如き〔自, 他, 自他の二, 無因から生じることと離れているもの〕である。

(所属性)

〔それ故に、自学派と他学派の人々が語るこれらのものも、自性をもたないものである(結論)〕

内容的には(arthatas)〔この推論式は〕能遍の非認識(vyāpakānupalabdhi)によるものである。生起ということが、事物の自性に遍充するからである。<sup>5)</sup>

と順次、自, 他, 自他の二, 無因からの生起を論破して行く。これは、Nāgārjunaの「中論」I-1を想起させることは、言うまでもないが、事実Kamalaśīlaは、この論証の結論部分で、そのMMK I-1を引用し、総括している。<sup>6)</sup> そのうち、「諸事物の無因からの生起」を破する部分で、次のような論述を行なっていることが、注目される。

<sup>7)...</sup>火と煙なども、直接知覚(pratyakṣa)と非認識(anupalabdhi)とによって、因果関係(kāryakāraṇabhāva)にあると証明されるから〔対論者が、あらゆる事物は、原因なくして生起するという〕主張命題に直接知覚との対立(pratyakṣabādha)もあるし、諸事物は、時として見られる故、依存性を具えていると証明されるから、推理との対立(anumānabādha)もある。能証(hetu)に基づいて、所証(sādhya)についての確定が生起することを認めるから、〔その〕主張命題に自分の言ったこととの対立(svavacanavirodha)もある。そうでなければ、証因を用いること(推論)は無意味なこととなる。主張命題のみによって、主張しようと思っていること(iṣṭārtha)は成立しない。〔主張命題のみで成立するならば〕あらゆるものが、あらゆる仕方でも成立することになってしまうからである。そういうわけで、〔我々の推論式の〕能証(hetu)は不成立(asiddha)なのではない。<sup>7)</sup>

(6) SDNS (3) P329b<sup>4-5</sup>, D286a<sup>1-2</sup>, C283a<sup>-2</sup>, N315b<sup>7-316a<sup>4</sup></sup>. 本稿訳 p.65<sup>9-10</sup>, fn. (328), テキスト p.70<sup>27-29</sup>

(7) SDNS (2) pp.138<sup>9-139<sup>4</sup></sup>

このように Kamalāsīla は、Dharmakīrti の論理学、知識論に大きく負いつつ、<sup>(8)</sup> 自己の定説「一切法無自性」を証明して行くのである。とりわけ、Dharmakīrti の「因果関係は、直接知覚と非認識によって証明される<sup>(9)</sup>」という理論を、先の部分では肯定的に採用することによって、対論者の見解を論破していた。

他方、Kamalāsīla は、この Dharmakīrti の因果関係の理論そのものを破している点を検証し、Kamalāsīla の因果論及び無自性論証の方法論を探究する。

### Kamalāsīla の問題とする Dharmakīrti の理論

Kamalāsīla が、論難の対象としている Dharmakīrti の理論とは、<sup>(9a)</sup> 以下の点に集約されると思われる。なお、以下の3)、4)を除く諸理論も Dharmakīrti 自身、世俗の立場から展開しているのであろうが、Kamalāsīla も中観の立場(勝義)からではなく、Dharmakīrti 自身の理論を逆用して、世俗的立場から論難を展開する。

- 1) 因果関係は、直接知覚 (pratyakṣa) と非認識 (anupalabdhi) によって証明される<sup>(10)</sup>。——因果関係の理論
- 2) 直接知覚は、概念知 (kalpanā) を離れ、迷乱なきこと (abhrānta)<sup>(11)</sup> ——直接知覚の特性
- 3) 所取能取の形象 (grāhyagrāhakākāra) の顯現は迷乱によるものであり、<sup>(12)</sup> 知は本来的には形象をもたないものである。——無形象唯識説、自己認識

(8) 他に、cf. Māl P187a<sup>3</sup>-b<sup>3</sup> D171b<sup>5-7</sup>=PV. Svārthānumānam 85, 86. Pratyakṣam 357, 358.

(9) Yuichi Kajiyama: Trikapañcakacintā, Development of the Buddhist Theory on the Determination of Causality インド学試論集 Nos. 4-5. (1963年10月) p.1. 12. Appendix 1-4. 同: An Introduction to Buddhist Philosophy, An annotated translation of the Tarkabhāṣā of Mokṣākaragupta 京都大学文学部紀要, N.10, 1966. p. 113, Note 305. cf. NBT 107<sup>5-6</sup> kāryakāraṇabhāvo loke pratyakṣānupalambhani-bandhanaḥ prāpti itī. 因果関係は、世間では、直接知覚と非認識を根拠とするものであることが、知られる。

(9a) 戸崎(出) p. 39, 51-54, 309-316. K°209-219.

(10) cf. (9) 及び以下の1)との関連。

(11) NB. I-4, PVin p.40<sup>2</sup>, 戸崎(出) p.388. fn. (20). cf. Note (30a) (33), PV. III K°123.

pratyakṣam kalpanāpoḍham abhrāntam

(12) PV 現量 212, 213, 217, 330d-332ab, 353-359 等。戸崎(出) p.312-313, 315, (下) p.

(svasaṃvedana) の理論

- 4) 知は光の如く、照明することを本性とし、他に依存することなく、自ら輝き現われる、という知の自己照明 (prakāśa) の理論。<sup>(13)</sup>
- 5) 種姓 (jāti) は、無自性ではあるが、諸の個物 (vyakti) に基づいて形成された概念であり、また種姓が自性をもつかの如く知に顕現すること、及び種姓の本性として外界の対象を理解することは、無始以来の見解の迷乱 (bhraṅti) である。<sup>(14)</sup>
- 6) Dignāga 以来の、直接知覚 (pratyakṣa) は個別相 (svalakṣaṇa) を対象とし、推理 (anumāna) は一般相 (sāmānyalakṣaṇa) を対象とする、との理論。<sup>(15)</sup>
- 7) 効果的作用の能力 (arthakriyāsamartha) のあるものが、勝義的存在であり、その他のものは、世俗的な存在である。前者が個別相を有し、後者は一般相を有するものである、との理論。<sup>(16)</sup>

特に 1), 3), 4), 5) については詳述することが必要と思われるので、さらに言及するならば、〈4), 5) に関しては、後述する〉<sup>(16a)</sup>

1) との関連

Dharmakīrti は、因果関係は、直接知覚 (pratyakṣa) と非認識 (anupalabdhī) によって、また肯定的必然関係 (anvaya) と否定的必然関係 (vyatireka) によって証明される。と提言し、論述している。すなわち、Pramāṇavārttika 自比量に

<sup>(17)</sup> 肯定的必然関係と否定的必然関係から、XにとってYが必然的であることが明らかである場合、そのXの本性は、Yを原因とするものである。従って、別々な [関係のない] ものから生起するのではない。 // 38 // <sup>(17)</sup>

15-17, 40-46, cf. 以下の 3) に関する詳述, SDNS IV. p. 58<sup>2-5</sup>, Note (130), p. 80<sup>2-4</sup>

(13) PV Pratyakṣam 329, 478-482. 戸崎(下) pp. 12-13, 160-163. cf. 本稿第一部 IV. (65)

(14) PV 現量 25-29. 戸崎(上) pp. 88-95.

(15) PV 現量 lab. 戸崎(上) pp. 57-58, cf. Note (31)

(16) PV 現量 3. 戸崎(上) p. 61, cf. SDNS IV. p. 57<sup>4-6</sup>, Note (128), p. 79<sup>19-20</sup>

(16a) 第一部 IV. (65)~(68)

(17) PV I. p. 24<sup>1-2</sup>

anvayavyatirekāḍ yo yasya dṛṣṭo'nuvartakaḥ /  
svabhāvas tasya taddhetur ato bhinnān na sambhavaḥ //38//

<sup>(18...</sup>  
 というのが、まとめの偈である。従って、一時に、見ること〈直接知覚〉と  
 見ないこと〈非認識〉によっても、因果関係は証明される。<sup>(18a)</sup>従って、そのこと  
 〈肯定的・否定的必然関係〉の承認は、〈直接知覚と非認識とによって証明さ  
 れる因果関係と〉別様にあるのではない。肯定的、否定的必然関係は、悉く、  
 見ること〈直接知覚〉と見ないこと〈非認識〉に依存するからである。<sup>(18b...</sup>  
 ある顕現 (gsal ba) に関して、一時に、見ること〔直接知覚〕によっても結果であ  
 ると証明されるから、あらゆる場合に、そうであるのと同様に、ある同品と異  
 品に関して、見ること〔直接知覚〕と見ないこと〔非認識〕によって、あらゆる  
 場合に、肯定的必然関係と否定的必然関係が確定されるということも、否定  
 される。というは<sup>...18b)</sup>ある場合には、具象的でないもの (amūrtatva) 〈虚空な  
 〉に常住性が知られても、別なもの〈幸福など〉に、別なあり方〈無常なも  
 のに、具象的でない性質が存在すること〉が知られるから、<sup>(18c...</sup>  
 〈あるものに見られることが、全てのものに見られるのではない。従って、見ること〔直接知覚〕  
 は、肯定的必然関係に関して、迷乱を有する。〉<sup>...18c)</sup>また、ある場合には、常住性  
 のないもの〈壺など〉に、〈具象的でないことは〉知られないが、〈幸福な  
 〉の常住性のないものには、具象的でない性質が 見られるから、因果関係  
 (tadutpatti) によって、結果には、原因との必然関係 (avinābhāva) が存在し  
<sup>...18)</sup>  
 よう。

〈 〉は Śākyabuddhi の解説、[ ] は筆者が補ったもの。

以上からも、Dharmakīrti が、直接知覚と非認識によって因果関係は証明  
 される、と声明している点、及び肯定的必然関係 (anvaya)、否定的必然関係  
 (vyatireka) が、直接知覚と非認識に依存するものであることが、知られる。  
 Śākyabuddhi が、それに立脚し、因果関係の証明には、非認識と二度の直接  
 知覚という三局面を必要とすると提言したこと (Trikavāda) も、梶山教授に

(18) PV I. p. 24<sup>3-8</sup>, PVT(Ś) I. D55a<sup>6</sup>-b<sup>6</sup>

(18a) PVT(Ś) I. D55a<sup>6</sup>.

de lta bas na lan cig mthoñ ba dañ ma mthoñ ba dag gis kyañ zes bya ba ni  
 ji skad bsad pa'i mñon sum dañ / mi dmigs pa dag gis rgyu dañ 'bras bu'i  
 dños po grub pa'i phyir /

(18b) PVT(Ś) D55b<sup>2-3</sup>

(18c) PVT(Ś) D55b<sup>4-5</sup>

よって明らかにされている。<sup>(19)</sup>

3) に関しては、PV. III. 212, 213, 217, 330d-332ab, 353-359 等に具体的な論述を看取することが出来る。特に後述する内容と密接に関連する212, 213偈を挙げておく。

確定するものが内に、この別の部分が、外界に設定されるように、知は、区別をもたないが、区別して顕現するのは、迷乱に他ならない。<sup>(21)</sup>

その場合、一方が非存在である故、両者とも、否定される。従って、その(知)にとって、二を欠いていることが真実である。<sup>(21)</sup> (213)

これに対する Devendrabuddhi の注は、次のようである。まず212偈について、

<sup>(22...)</sup>  
【反論】

(19) 煙の存在を知覚することによって、火の存在を推理する、ことの妥当性は、「煙のある所には、必ず火が存在する」という事実関係を前提として保証される。では「煙のある所には、必ず火が存在する」という必然性は、どのようにして証明されるのか。「因果関係は、直接知覚と非認識によって証明される」と提言した Dharmakīrti は、しかしながら、その証明に不可欠な認識手段 (pramāṇa) の数に関しては明言しなかつた。それ故に、その後の註釈家達の間で、理解の相違が見られたことは、周知の如く梶山教授により発表されている。Yuichi Kajiyama: *Trikapañcākacintā* [cf. Note (9)] p. 3, 12. 以下、筆者の責任において要約するならば、例えば、Śākyabuddhi は、三局面からなる認識が不可欠であると主張 (Trikaṇvāda) し、他方 Dharmottara は、五局面を必要とすると述べた (Pañcakaṇvāda)。Śākyabuddhi は、因果関係は、ある時に、非認識を前提とする直接知覚によって、そしてある時に、直接知覚を前提とする非認識によって確定される、と提言した。

最初 (1) 火も煙も知覚されない (非認識)

その後 (2) 火を知覚する (直接知覚)

そして (3) 煙を知覚する (直接知覚)

というようにである。

五局面の場合、さらに

(4) 火の滅するのを知覚する (非認識)

(5) 煙の滅するのを知覚する (非認識)

となる。cf. (42)

(20) cf. Note (12), 戸崎(下) p. 40 脚注(5)

(21) *paricchedo'ntar' anyo'yaṃ bhāgo bahir iva sthitaḥ / jñānasyābhedino bhedapratibhāso hy upaplavaḥ // (212)*  
*tatraikasyāpy abhāvena dvayam apy avahiyate / tasmāt tad eva tasyāpi tattvaṃ yā dvayaśūnyatā // (213)*

cf. Note (12), SDNS IV. p. 58<sup>2-3</sup> 及び Note (130) p. 80<sup>2-4</sup>, 戸崎宏正『後期大乘仏教の認識論』講座仏教思想、第二巻 (理想社, 1974) pp. 148-149

(22) PVP D193b<sup>5</sup>-194a<sup>1</sup>, P226a<sup>4</sup>-b<sup>1</sup> cf. 戸崎(上) p. 313. fn. (55)

外界の対象は、存在しないが、二としての顯現を有する知は、勝義として実在する。

〔答論〕

知 (buddhi) は、二を有するものであるが、単一な知に、勝義として、その二なる形象 (ākāra) は不合理である。〔知の〕単一性が崩れてしまうからである。……単一な知は部分によって存在しない。そうであれば、勝義として、それ (知) は、<sup>…22)</sup> 区別をもたない。

213偈については、

<sup>(23…)</sup> その単一な知の本体に、何れか、所取あるいは能取の形象が存在しない場合、〔その二を〕無理やり、承認するなら、両者 (所取・能取の形象) と崩れてしまおう。所取性と能取性は、互いに、依存し合って、それら二が、確定されるからである。このように、知に、両者 (所取・能取の形象) は、あり得ない。従って、〔知は〕二 (所取・能取の形象) を欠いている。<sup>…23)</sup>

ここで知られることは、所取・能取の形象を有した知を、勝義としての実在とする有形象唯識説<sup>(24)</sup> に対して、所取・能取の二形象 (= 迷乱) を欠く無二知を真実在とする無形象唯識説を対置させ、有形象唯識説の不整合性、すなわち、単一な知に、所取・能取の形象という二があり得ないことを指摘することにより、無形象唯識説へと導いている。

ところで、この所取・能取の二形象を欠く無二知を真実在とする見解——無形象唯識説と、1) の因果関係は直接知覚と非認識とによって証明される、とする説や、2) の直接知覚は概念知を離れ、無迷乱との説は、互いに抵触することなく、成立するのであろうか。この点を問い、かつ論破しているのが、以下に示すところの Kamalāsīla の見解なのである。それは、Kamalāsīla の無自性論証 (niḥsvabhāvasiddhi) の一環として、しかも重要な方式として現われるものである。すなわち、何らかの自性 (svabhāva) が、承認されるならば、そこには因果関係が証明されるはずである。<sup>(25)</sup> 逆に、因果関係 (kāryakāraṇabhāva)

(23) PVP D194a<sup>2-3</sup>, P226b<sup>2-3</sup>

(24) 戸崎(出) p. 312<sup>18-20</sup>

(25) Māl P198a<sup>5-b<sup>5</sup></sup>, D181a<sup>6-b<sup>4</sup></sup>

我々も、言葉だけで、一切法無自性を証明するのでもないし、帰謬 (prasaṅga) 論法だ

が、証明されなければ、それは、無自性ということになる。<sup>(26)</sup> というのが、Kamalaśīla の「無自性論証」の基軸である。そしてそれは、pramāṇa すなわち、直接知覚 (pratyakṣa) と推理 (anumāna) によって順に吟味される。以下 I～IV の検証方法により、Kamalaśīla の Dharmakīrti 批判を吟味する。

## I. Kamalaśīla の Dharmakīrti 批判(1)

### —直接知覚 (pratyakṣa) による因果論の検証—

Kamalaśīla が、*Madhyamakāloka* で、有形象 (sākāra) と無形象 (nirākāra) の直接知覚によって、因果関係は、確定されない、と論述した後、<sup>(27)</sup> Dharmakīrti を始めとする仏教論理学派と Kamalaśīla との間で、先の 1) 2) 3) の理論を巡

けによってでもない。[その証明法は] 何であるのか。正しい認識方法 (pramāṇa) によって証明するのである。というのは、諸事物に勝義的自性が存在するなら、二種のみであろう。あらゆるものは、因 (hetu) と縁 (pratyaya) に依存して生起するから、無常な (anitya) 自性を有するものである。例えば、経量部 (Sāutrāntika) と瑜伽行派 (Yogācārin) 達が主張する如きものか、あるいは、自性として、勝義的に成立する本体のものであるから、堅固なもの (dṛḍha) に属するもの、例えば、非仏教徒 (Tīrthika) などによって構想されている (parikalpita) 自我 (ātman) などの如きものであるか、の何れかである。……というのは、直接知覚 (pratyakṣa) か、あるいは推理 (anumāna) が、証明する認識方法 (pramāṇa) ということになる。そのうち、第一の事物の本性 (無常な自性) というものは、[経量部と瑜伽行派の主張する] 両 [見解として] も、勝義として成立するものではない。というのは、因果関係 (kāryakāraṇabhāva) が証明されれば、それ (無常な自性を有すること) が成立しよう、その因果関係も、まず、直接知覚によっては、勝義としては証明されない。それ (因果関係) は、感官の機能 (indriya) によって起こる直接知覚 (pratyakṣa) か、あるいは、自己認識 (svasaṃvedana) の直接知覚によって証明されようが、一般人 (arvāgṛḥ) 達は、ヨーギンの直接知覚 (yogipratyakṣa) によって、言葉を設けないから、また、意知覚 (manopratyakṣa) は、どんな場合にも、認められるものではないから、その二 (yogipratyakṣa と manopratyakṣa) によって、それ (因果関係) が証明されるとは、考えられない。

(26) MāI P205b<sup>5-8</sup>, D187b<sup>7</sup>-188a<sup>3</sup>, cf. SDNS (2) p.135 Note (58b) そういふわけで、勝義として、因果関係 (kāryakāraṇabhāva) を証明する確実な認識手段 (pramāṇa) は、全く存在しない。因果関係は、まさしく世俗的なものであって、師達は、肯定的必然性 (anvaya) と否定的必然性 (vyatireka) によって、因果関係は、世間一般に知られるがままに、証明ささると言われるが、勝義としてではないと理解しなければならぬ。そうであれば、まず、勝義的な無常な (anitya) 自性を正しく証明する認識手段 (pramāṇa) は全く存在しない。……常住な (nitya) 自性を、正しく証明する認識手段も存在しない。というのは、それ (常住な自性) も、直接知覚 (pratyakṣa) によって証明されない。

cf. 中観莊嚴論, 第84偈。Ichigō p.274.

(27) MāI P202a<sup>3-4,6-7</sup>, D184b<sup>4-5,7</sup>.

っての対論が展開している。

〔仏敎論理学派の提言〕

<sup>(28…)</sup> 有形象と他なる（無形象）知（buddhi）が、別の対象を確定することは不合理であるから、因果関係を確定する確実な認識手残（pramāṇa）はないのであるが、そうではなくて、無二なる知（jñāna）を語ることには、全く拒斥するものはない。かの論理学者の考えによれば、あらゆる事物は、唯心（citta-mātra）であることを本質としている。その場合、別のもの〔外界〕を、直接知覚することは、不合理であるけれども、知自体を、自己認識（svasaṃvedana）の直接知覚によって知るのであって、それ（自己認識の直接知覚）も、原因と結果であることは、成立するので、因果関係（kāryakāraṇabhāva）は、直接知覚されると、まさしく証明される。<sup>…28)</sup>

反論者は、無二知としての知の自己認識〔=3〕の理論を根拠に、因果関係は成立する、と述べるわけであるが、これに対する Kamalaśīla の論破の方法は、1. 所取能取の形象を見えた有形象唯識説を提出し、対抗措置としていること、2. 直接知覚の特性〔理論2〕を提出することによって、仏敎論理学派の主張する無形象唯識説の難点を指摘する。すなわち、

〔I-1〕〔Kamalaśīla の論難〕

<sup>(29…)</sup> それも不合理である。真理は、あるがままに知覚されないから。また知覚されたままのものは、真理ではないからである。というのは、汝（仏敎論理学派）が、所取能取の形象を具えていない知（vijñāna）を実在であると主張するなら、それ（知）は、そのように知覚することはない。あらゆる時に、あらゆる所取・能取の形象を具えた知が、知覚されるからである。<sup>(29a)</sup> さもなければ、すべての人が、真理を見ることにならう。<sup>(29b)</sup> その知は、知覚されるままに

(28) Māl P202a<sup>7</sup>-b<sup>1</sup>, D184b<sup>7</sup>-185a<sup>2</sup>

(29) Māl P202b<sup>1-4</sup>, D185a<sup>2-4</sup>

(29a) 対論者の無形象唯識説に対して、Kamalaśīla は有形象唯識説を提出し、論難している。cf. Note (32c) (59b)

(29b) Śākyabuddhi の PVT(Ś) 自比量 D114b<sup>5</sup> に対論者の主張として次のようにある。「自己認識（svasaṃvedana）が無二（advaya）であるなら、その自己認識は直接知覚である故、すべての者が、真理を見ることにならう。」——この種の詰問に対する Śākyabuddhi 自身の弁明は〔PVT(Ś) 現量 P252a<sup>4-6</sup>, D204b<sup>1-3</sup>〕「認識（bodha）を本

あるのでもない。単一なもの(知)に、二なる本性(所取能取の形象)があることは、矛盾するからである。

この Kamalāsīla の言明に対し、仏教論理学派は PV. III. (212) に述べられる如く、迷乱に基づき、所取能取の二形象が、知に顕現することを説明するが、結局、この理論は、無迷乱であるはずの直接知覚の特性と矛盾することになるというのが Kamalāsīla の論難である。

[I-2] [仏教論理学派の提言]

<sup>(30...)</sup> それ(単一な知)が、迷乱(bhrānti)によって、そのように(所取・能取の二形象の顕現)を知る。

[Kamalāsīla の論難]

この迷乱とは、何であるのか。もし、知がそれ(迷乱)そのものであるなら、その(知)は、直接知覚ではない。直接知覚の特性は、迷乱なきこと<sup>(30 a)</sup> (abhrānta) であるから、また、それ(知)は、常に、自己にとって、自ら迷乱するからである。二(所取・能取の形象)を本体とするものとしても、それ自体(知)が顕現するから、無二を本性とすることが、崩れてしまうことになる。二と無二とは、互いに矛盾するからである。迷乱は[無二知と]別なものであっても、それ(迷乱)も、自己認識に属するもの<sup>(30 b...)</sup> であるから、それ(自己認識)によって、無二とそのように知られることはない。<sup>(30 b) ... (30)</sup>

では所取・能取の形象を欠く無二知である自己認識の直接知覚とは何であるのか、概念知(kalpanā)を欠くことを特性とし、個別相(svalakṣaṇa)を対象とする直接知覚が、<sup>(31)</sup> どう因果関係を証明し得るのか。この点を組上にのせてい

性とするものも自己認識の直接知覚として成立するなら、すべての者によって真理が見られることにもならない。というのは、その認識(bodha)<sup>①</sup>を本性とするものに、部分(bhāga)はないから、[すべての者に]捉えられはしても、迷乱した種子(bija)を伴うから、認識(bodha)されるようには、無二の確定は起こってこないであろう。従って、無二を本性とするものは、捉えられはしても、捉えられないものと似ている。」<sup>①</sup> [P252a<sup>5</sup>] は rtog pa であるが D[204b<sup>2</sup>] により rtogs pa と読む。同じく、対論者の主張として PVT(Ś) 現量 P251a<sup>6</sup>, D203b<sup>6</sup> 「単一な知に、二なる形象(ākāra)が真実としてあることが矛盾するなら、その二なる形象から、何が妥当し、真実なものとなるか。」=Māl P180b<sup>8</sup>, D166a<sup>1</sup> cf. Note (57a), (58c)

(30) Māl P202b<sup>4-6</sup>, D185a<sup>4-6</sup> cf. (40a) 最後部。

(30a) cf. Note (11), Māl [P185b<sup>6</sup> D170a<sup>6-7</sup>] [P196a<sup>1</sup> D179a<sup>4</sup>]

(30b) Māl D185a<sup>6</sup> によって読む。P202b<sup>6</sup> om.

(31) cf Note (15)

るのが、以下の論議である。

[I-3] [仏教論理学派の提言]

直接知覚は、概念知 (kalpanā) を本性とするものにすぎない。<sup>(32 a)</sup>

[Kamalaśīla の論難]

そうであれば、直接知覚は、個別相 (svalakṣaṇa) を対象とするものではない。<sup>(32 b)</sup> 概念知を本性とするものは、一般相 (sāmānyalakṣaṇa) を対象として有するものでもあるから。あるいは又、概念知の本性というものは、自ら顕現する本体のものに対していわれる。所取・能取の二形象も、自ら顕現するから、<sup>(32 c)</sup> 概念知を本性とするものに他ならない。その二 (所取・能取の形象) も、虚偽 (alika) であるなら、それと同様に、それぞれ別でない、概念知を本性とするもの (直接知覚と所取・能取の二形象) も、虚偽を本性とするとき、どうして、直接知覚の認識手段 (pramāṇa) によって、[因果関係が] 正しく証明されるものであろうか。<sup>(32 d)</sup> 諸の特殊な物 (viśeṣa) が、虚偽 (alika) であるなら、<sup>(32 d...)</sup> 概念知を本性とするものは、何も、実在としてあり得ない。一般的なもの (sāmānya) は、諸の特殊物の中で、他を排除して言葉を設けたものだからである。<sup>(32 d)</sup> そうであれば、知は、真実をありのままに知覚しないから、これ (概念知を本性とするもの) が、自己認識の直接知覚 (svasaṃvedana-pratyakṣa) であることは不合理である。

所取・能取の二形象の顕現を迷乱 (bhranti) に根拠を求め、さらにその辻褃を合わせんとして、「直接知覚は、概念知を本性とする」という対論者の主張

(32) Māl P202b<sup>6</sup>-203a<sup>1</sup>, D185a<sup>6</sup>-b<sup>1</sup>

(32a) cf. PV. III. 123. 戸崎(出) pp. 203-205, fn (5)-(9); cf. PVT(Ś) 現量 P252a<sup>2</sup>,<sup>4-5</sup>, D204a<sup>7</sup>, b<sup>1-2</sup> その認識 (bodha, rīogs pa) の本性こそが、自己認識 (svasaṃvedana) のみ (mātra) としてある。……認識 (bodha) を本性とするものも自己認識の直接知覚として成立するなら、すべての者によって真理が見られることにもならない。cf. (58c) 最後部, (29b).

(32b) Māl. D によって rīogs pa と読む。以下も同様。

(32c) 有形識唯識説を提出することによって、対論者の無形象唯識説を追及している。cf. SDNS IV. p. 60<sup>12</sup>-61<sup>4</sup>, Note (136) (137), p. 81<sup>1-8</sup> 及び本稿. (29a) (59b).

(32d) cf. PV 知覚 (30), 戸崎(出) p. 95<sup>8-14</sup>  
arthhānām yac ca sāmānyam anyavyāvṛttilakṣaṇam /  
yanniṣṭhās ta ime śabdā na rūpaṃ tasya kiñcana //

は、自らの定説<sup>(33)</sup>に矛盾する、というのが Kamalaśīla の指摘である。

知は、単一であり、原因と結果は二つの事柄である。さらに因果は同時には存在し得ず時間的な隔りをもっている。この点からして、単一な知と、状況<sup>(34)</sup>を異にする二要素——因果とは、いかなる関係も結べない、と Kamalaśīla は、以下のように論難する。

[I-4] 知は、自己認識の直接知覚<sup>(35…)</sup>ではあっても、それから、因果関係は証明されない。自己の本体は、単一である故、原因と結果である二なる本性のものとは矛盾するからである。……因果を本性とし、別のものである二つの知は、別々の時間に属するから、単一な知が、[因果の二を]知覚することはない。……その(因果)の二が、単一な知に知覚されないなら、如何様にしても、必然的關係を持つことは出来ない。単一な知に顕現するけれども、これが原因であり、これが結果である、と明瞭にその(因果の)二が、そうあるとの必然的關係を持つことはできない。それ(自己認識の直接知覚)は、無分別(avikalpa)であるから。[その直接知覚に]全く必然的關係は把握されないし、因果関係も把握されない。[もし、それらがあるとすなら]過大適用の過失<sup>(35)</sup>となるからである。

[同一の心識の連続(samāna)という点でも、因果は知られない、との論議]

[I-5] 同一の心識の連続<sup>(36…)</sup>(samāna)であから、同一のものとして知覚経験されると考えることも不合理である。同一のものと考えられる心識の連続は、実体をもたないものであるから。別の心識の連続を有する人々も、互いに知覚しあうことはないから。確定知が機能する時にも、因果は、過去のものであるから。それ故に、自己認識の直接知覚(svasaṃvedanapratyakṣa)によ

(33) cf. Note (11) (30a) 及び (15)

(34) MāI P201b<sup>8</sup>, D184b<sup>2</sup> 因果関係(kāryakāraṇabhāva)は、同時にはあり得ないから、cf. SDNS (2) p. 129 [I.B.2.2.3.5], p. 151-2

(35) MāI P203a<sup>8-8</sup>, D185b<sup>2-6</sup>

(36) MāI P203b<sup>1-3</sup>, D186a<sup>1-2</sup>

(36a) cf. PV 現量(180) 戸崎(田) p. 280<sup>7-16</sup>, 直接知覚は現在のものを対象とする。  
atītam apadṛṣṭāntam aliṅgaṅ cārthavedanam /  
siddham tat kena tasmin hi na pratyakṣam na laiṅgikam //

換言すれば、過去のもは直接知覚されない、この理論を逆用して Kamalaśīla は論難している。

…<sup>36)</sup>  
 っても、勝義的な因果は証明されない。

[I-6] さらに対論者は、<sup>(37…)</sup>「因果が、直接知覚として知られないなら、どうして、そこ(知)に、記憶(smṛti)が起こってくるのか」と記憶の成立がどう説明されるのかと問題を提起している。これに対する Kamalaśīla の応答は、<sup>(38…)</sup>「ありありと見た夢(svapna)などで[実際に]知覚経験されていないことでも記憶され得るから」と、夢を例に挙げ、対論者の詰問をかわしている。そして、<sup>(39…)</sup>「以上のことからして、まず、直接知覚(pratyakṣa)によって、それ(因果関係)が証明される、というのは不合理である」と結論する。<sup>(39)</sup>

以下に《直接知覚による因果論の検証》を総括しておく、特に I-1~4 の論議で、Kamalaśīla が直接批判の焦点としている点は、「因果関係は、直接知覚と非認識によって証明される」との理論に立脚する Dharmakīrti を始めとする Devendrabuddhi や Śākyabuddhi を含め得るであろう仏敎論理学に対して、所取・能取の二形象を欠いた無二知としての自己認識が因果関係にあるなら、因果という二契機を区別しないはずの直接知覚の特性と矛盾し、直接知覚によって証明されるものではない、という点に集約される。結局、冒頭に示した 1)~3) 及び 6) の仏敎論理学派の見解は、Kamalaśīla によれば互いに抵触することなく成立するとは証明し得ない、ということになるのである。

つづいて、Kamalaśīla は、「因果関係は、推理によっても証明されない」と論議を展開する。そこでは、先の直接知覚による吟味のところで、基軸となっていた「所取能取の二形象を欠いた無二知としての直接知覚の自己認識」は、直接祖上にのせられてはいない。むしろ、主に論理学上の問題に限定されて、因果関係の不成立が論議されている。所取能取の二形象を欠いた無二知という知識論上の問題と推理とが直接問題にされる点は後述する。

## II. Kamalaśīla の Dharmakīrti 批判(2)

— 推理(anumāna)による因果論の検証 —

<sup>(40…)</sup>  
 [因果関係は] 推理によっても [証明され] ない。

(37) MāI P203b<sup>3-4</sup>, D186a<sup>2</sup>

(38) MāI P203b<sup>4</sup>, D186a<sup>2</sup>

(39) MāI P203b<sup>5</sup>, D186a<sup>3</sup>

[II-1] [Dharmin (主題) の検討]

陳述されたままの仕方では、直接知覚として知覚される何らの Dharmin も成立しないから、あるものに関して、その (因果) 関係を証明するあらゆる能証 (hetu) も、自己の本性が成立せず、所依不成 (āśrayāsiddha) である。喩例 (dṛṣṭānta) の Dharmin も成立しない。あらゆる場合に、批判となるところは同じだからである。<sup>40)</sup>

[II-2] [結果の能証 (kāryahetu) の検討]

<sup>41)...</sup> また、まず、結果の能証によっては、その (因果) 関係は証明され得ない。

[証明するもの (結果の能証) と証明されるもの (因果関係) が] 相互に依存し合うという誤謬となるであろうから。因果関係 (kāryakāraṇabhāva) が、成立するなら、結果の能証においてであろうし、結果の能証が、勝義的に成立するなら、因果関係が成立する故、相互に依存し合うことは明白である。<sup>41)</sup>

結果の能証 (kāryahetu) による推理とは、例えば、火の結果である煙を能証として所証である火を推理するものであるが、この推理が成立するためには

(40) Māl P203b<sup>5-7</sup>, D186a<sup>3-4</sup>

(40a) Kamalaśīla は、以下の同一性の能証 (svabhāvahetu) の検討のところ [II-3-1, II-3-4] でも、主題 (Dharmin) の不成立について言及している。これと対照されるものは、次に示すような Śākyabuddhi の Dharmin 成立説であろう。Śākyabuddhi は (29b) に示した PVT(Ś) 現量 P252a<sup>4-6</sup>, D204b<sup>1-3</sup> に続いて [P252a<sup>6-b4</sup>, D204b<sup>3-7</sup>] 「これのみで、認識 (bodha) を本性とするものも、一般相としての主題 (sāmānyadharmin) 一般として成立しないことはない。そうであれば、認識の特性を具えた Dharmin は、二と無二を本性とするものであって、区別 (bheda) の本性を確定しないから、Dharmin 一般も確定されない、という考えを抱く者によっては、論述はされ得ない。そうであれば、言葉などに関しても、一般的に Dharmin が成立する場合、刹那と非刹那の特性によって、論争するとき、後に推論するであろう。推理によって、先に刹那などを本性とする特殊物 (viśeṣa) は、成立しないから、Dharmin 一般も成立しない、と論述し得ない場合、どおして、所依不成能証 (āśrayāsiddhahetu) となろうか。あらゆる推理 (anumāna) に関しても、一般的に Dharmin は成立すると言われる。そうであれば、論争の所依 (āśraya) となっている Dharma も Dharmin が確定するときに、確定するであろう、その時、三条件を具えた能証 (trirūpaliṅga) を追究している人 (arthin) は、目的を達する (don med pa, anartha ここでは、これ以上追究するものがなくなる、という意か?) であろう。それ故に、この場合も、一般的に、喜びなどを具えている Dharmin である認識 (bodha) が、直接知覚 (pratyakṣa) として成立するのではあるが、迷乱 (bhrānti) が存在するために、無二 (advaya) を本性とすることが、確定しない場合にも、それ (喜びなどの Dharma) は、成立することになるから推理するのである。」

(41) Māl P203b<sup>7-8</sup>, D186a<sup>4-6</sup>

「煙がある所には必ず火がある」という必然性<sup>(42)</sup>が、言わば前提となる。煙は火の結果であると共に、推理の場合は、火の存在を証明するための因である。こういった点を Kamalāsīla は、相互に依存し合う誤謬と呼んでいるものと、考えられる。つまり因果関係の成立を立証しようとする結果の能証 (kāryahetu) によっては、因果関係は証明され得ないと、Dharmakīrti の論理学の自己矛盾を突いた形となる。

[II-3] [同一性の能証 (svabhāyahetu) の検討]

<sup>(43)</sup>  
[II-3-1] 同一性の能証も、Dharmīn が不成立であるから、どこでその機能を發揮し得ようか。Dharmīn が成立するとしても、勝義的な因果関係を証明しようとする場合、何処に於ても、能証を遍充するもの (vyāpti) は成立しない。あらゆる場合に、過失となるところは同じだからである。あるいは、

[II-3-2] 又、汝が「因果性は、勝義として証明されるから、すなわち、それ [能証：例えば、シンシヤパーと呼ばれ得ること]<sup>(43a)</sup> が在るなら、存在する事柄 [所証：例えば、樹木と呼ばれ得ること]<sup>(43a)</sup> であるこのことを述べるなら、それも迷乱である。その原因 (hetu) と同時に存在するもの、すなわち、すべての存在 (jagat) が、在るなら、[所証は] 存在するものではあっても、その原因 [シンシヤパーと呼ばれ得ること] を有するものではあり得ないからである。

[II-3-3] [反論]

心識の連続 (saṃtāna) のみに関して、肯定的必然関係 (anvaya) と否定的必然関係 (vyatireka) によって、在るならば、[所証の] 在ることを確定するその能証を述べるが、刹那 (kṣaṇa) に関して [述べるの] ではない。

(42) cf. (19)

(43) MāI P204a<sup>1-7</sup>, D186a<sup>6-b<sup>4</sup></sup>

(43a) 同一性の能証に基づく推理とは、例えば、

「シンシヤパーと呼ばれ得るものは、木と呼ばれ得る (必然性)

これは、シンシヤパーと呼ばれ得る (所属性)

これは、木と呼ばれ得る (結果)」

「作られたものは無常である (必然性)

音声は、作られたものである (所属性)

音声は、無常である (結論)」

〔答論〕

それ（刹那）も、ここで、勝義的因果を証明する立場にあるから、〔その主張は〕不合理である。刹那とは別に、勝義的心識の連続は、証明されないからである。ある原因の刹那が、在る時に在ると考えられるある結果の刹那、それは、その（原果の刹那）と同時に存る、全てのものものに属するあらゆる〔原因の〕刹那が存る時に在るのである。丁度、それ（結果）は、自己の原因の刹那が存る時に見られ、それ（自己の原因の刹那）がない時に見られないように、そのように、それ（結果）は、原因の刹那と同時にあるもの、すなわち、すべてのものに属するあらゆる〔原因の〕刹那が在る時にこそ見られ、それ〔すべてのものに属するあらゆる原因の刹那〕が、ない時には、見られない故、それぞれ〔の結果〕が、原因を有するものにこそ、どうしてならないであろうか。<sup>…(43)</sup>

II-3-1 で、Dharmin の不成立に言及し、II-3-2, II-3-3 で「同一性の能証」による因果関係の吟味を展開しているが、筆者には、読解及びその理解に不十分なものが残るが、その内容はこういうことであろうか。II-3-2 では、所証〔樹木と呼ばれ得ること〕を立証する為に、「シンシャパーと呼ばれ得るから」という特定の木の種類を能証として使用しても、能証と所証の因果関係を示すものとはならない。なぜなら、別種の木「桜と呼ばれ得るから」という能証によっても、「樹木と呼ばれ得ること」という所証は立証されるであろうから、シンシャパーと樹木との必然性はないことになる。

II-3-3 では、心識の連続 (saṃtāna) と刹那 (kṣaṇa) を別個な事柄として扱うことは出来ず、刹那を考慮する限り、因果同時<sup>(44)</sup>ということになり、原因＝結果、つまり能証＝所証ということで因果関係は立証されなくなる、との主旨と筆者は、理解した。

引き続き Kamalaśīla は、「同一性の能証」の検討として再び Dharmin、及び Dharma の問題に言及している。

〔II-3-4〕<sup>(45)</sup> また、「それが在れば、在るから」というこの場合に、「それ」とい

(44) cf. (34)

(45) MāI P204a<sup>7</sup>-b<sup>3</sup>, D186b<sup>4-7</sup>

う言葉によって、別の Dharmin が、原因となっているものに関係付けられるとき、それ (Dharmin) も、まず勝義として直接知覚されることは成立しない。以前に述べたとおりである。

推理によっても、Dharmin が存在することは証明され得ない。 [Dharmin が] 存在することを証明する場合、あらゆる能証が、三つの誤謬を克服しないからである。というのは、Dharmin が成立しないならば、まず、有なる Dharma は能証ではあり得ない。無なる Dharma も、矛盾しているから不合理である。[有無という] 両者としての Dharma は、迷乱している。[有であり無でもある Dharma が成立するなら] 異品にも [Dharma が] 存在するからである。あるものによって、証明される別なあり方も存在しない。それ (Dharmin) が成立しないなら、他方の「それ (能証・Dharma) が在れば、在るもの (所証)」も成立しない。それ (能証・Dharma) は、それ (Dharmin) に依存しているからである。結果の能証 (sādhana) も、それ (同一性の能証の場合) と全く同じように、[因果関係を証明] し得ない。

[II-3-5] したがって、ここで、同一性の能証 (svabhāvahetu) によって、因果関係 (kāryakāraṇabhāva) は証明され<sup>45)</sup>ない。

Dharmin は直接知覚によっても、推理によっても成立しない。ならば、その Dharmin (=Pakṣa) に所属するはずの Dharma (=能証, hetu, liṅga) も成立し得ない。結局、svabhāvahetu は、能証の三条件の第一、主題所屬性 (pakṣadharmatva) を満し得ないわけである。Dharmin 及びそれに依存する Dharma が不成立であれば、同品定有性 (sapakṣe sattva) も、異品遍無性 (vipakṣe'sattva) も満し得ず、svabhāvahetu は、能証の三条件の何れにも抵触することになる。

同一性の能証 (svabhāvahetu) によって因果関係は証明されないとする Kamalaśīla の論難のポイントは、次の三点にある。

1. 能証と所証の必然関係
2. 因果同時
3. Dharmin, Dharma の不成立より起因する能証の三条件との関係

[II-4] [非認識 anupalabdhi の検討]

(46... 非認識によっても「因果関係は証明され」ない。全てのそれ（非認識）は、まさしく否定（pratiṣedha）を証明するものだからである。また「因果関係の証明は、直接知覚と非認識である」と言われる場合でも、非認識という言葉は、それとは別なものを認識することを本性とする、まさしく直接知覚であることを指示しているが、推理ではない。それ（非認識）も、確実な認識（pramāṇa）ではない、とそのように以前に述べ終っている。<sup>(46)</sup>

非認識は、推理ではなく、直接知覚を意味するし、否定を証明するものであるから、因果関係を肯定的に証明するものではない。さらに、非認識は pramāṇa として承認されない、ということが、ここでの Kamalāśīla の指摘である。Dharmakīrti の定説を真っ向から論難している。なお、その先 Śāntarakṣita は「非認識は壺などを欠いている大地などを認識する故、直接知覚である<sup>(46a)</sup>」と言明し、さらに溯って Jñānagarbha は「(有形象知は) 直接知覚と非認識によって因果関係にあるとは証明されない<sup>(46b)</sup>」と述べている。

さらに続いて Kamalāśīla は「Aがあれば、正しく認識されるBは、Aの結果である」という肯定的必然関係<sup>(47)</sup>（anvaya）によって、また「Aがなければ、存在しないBは、Aの結果である」という否定的必然関係<sup>(48)</sup>（vyatireka）によって、因果関係（kāryakāraṇabhāva）が証明される、という見解を論破している。<sup>(49)</sup>

#### [II-5] 肯定的必然関係（anvaya）の検討

Dharmakīrti は「因の三相」の第二条件、同品定有性、第三条件、異品遍無性と密接に関わるものとして anvaya や vyatireka の理論を述べると共に、PV. 現量412偈では、「遠近による知覚の鮮明、不鮮明の相違の原因」を光の強弱の相違に求めること及び眼に見えない（認識されない）こと（adr̥ṣṭa）に求める

(46) MāI P204b<sup>3-5</sup>, D186b<sup>7</sup>-187a<sup>2</sup>, cf. (57) [I-3]

(46a) SDP, D28a<sup>3</sup>, TS K<sup>4</sup>91 及び TSP のその解説。G. Jha による英訳 Vol. I, p. 291.

(46b) SDV D7a<sup>3-4</sup>

(47) MāI P204b<sup>5-6</sup>, D187a<sup>2</sup>

(48) MāI P205a<sup>1-2</sup>, D187a<sup>5</sup>

(49) cf. PVT(Ś) 自比量 D55b<sup>6</sup>

したがって、因果関係（kāryakāraṇabhāva）の確定からこそ、肯定的必然関係（anvaya）と否定的必然関係（vyatireka）の二が、確定される。

ことの不合理を指摘している<sup>(50)</sup>。Dharmakīrti のこういった理論を想定してのことと思われるが、Kamalaśīla は以下のように anvaya と因果関係との矛盾を論難している。

<sup>(51)...</sup> 認識の条件が獲得されていないもの (anupalabdhi-lakṣaṇa-prāpta) の場合、例えば、

もし、まさしく [Aが] 在れば、[Bが] 存在すること、あるいは、眼に見えない (adr̥ṣṭa) 悪霊 (piśāca) などが、近くにある (āsanna) ことによって、あるいは、遠い (dūra) 場所にある別のものが、近いということ<sup>(51)</sup>で知られるということは、疑わしい (saṁdigdha)。……Aが在れば、Bが必ず存在する (=anvaya) ということは、偶然的な (yādṛcchika) 場合もある。月などが、遠くの場所に在っても、眼識 (cakṣurvijñāna) などの原因 (hetu) となるものと認められないことはない。

[II-6] 否定的必然関係 (vyatireka) の検討

<sup>(52)...</sup> また、その別の諸原因は、効力 (śakti) であるから、Aがなければ、存在しないBは、Aの結果である、という否定的必然関係 (vyatireka) によって、それ (因果関係) が証明されると言われるその場合にも、勝義としては、疑わしを排除し得ない。悪霊 (piśāca) などの別のものが、あるいは、遠い場所に在るAがなければ、Bもない、ということは疑わしい (saṁdigdha) からである。Aがなければ [Bは] 存在しない (=vyatireka) ということが、疑わしい場合もあり得るからである。結婚しない習わしのある所で生まれた Kharjūra が、結婚しないという必然性 (nāntariyaka) を有することは [疑わしい] <sup>(52)</sup> ように。

anvaya, vyatireka によっても因果関係は証明され得ないと論述し、結局、因果関係は世俗としてのものであり、勝義ではないと Kamalaśīla は論じる<sup>(53)</sup>。そして、この因果関係 (kāryakāraṇabhāva) の吟味の冒頭に示されていた如

(50) 戸崎(下) pp.90<sup>16</sup>-92<sup>10</sup>  
atyāsanne ca suvyaktaṁ tejes tat syād atisphuṭam /  
tatrāpy adṛṣṭam āśritya bhaved rūpāntaraṁ yadi // (412)

(51) Māl P204b<sup>5</sup>-205a<sup>4</sup>, D187a<sup>2-4</sup>

(52) Māl P205a<sup>1-3</sup>, D187a<sup>5-6</sup>

(53) Note (26), cf. 中観莊嚴論, 第84偈。Ichigō p.274.

く、経量部や瑜伽行派の主張する「無常な<sup>(54)</sup>自性」というものは、成立しないと結論する<sup>(55)</sup>。つまり勝義として、因果関係の不成立を検証することが、Kamalaśīla の無自性論証の方式なのである。

すなわち、推理 (anumāna) によっても因果関係は証明されないとする Kamalaśīla の Dharmakīrti 批判 (2) の要点とは、

三条件 (因の三相) を充足し得る三種の能証、すなわち結果 (kārya)、同一性 (svabhāva)、非認識 (anupalabdhi)、及び肯定的必然性 (anvaya)、否定的必然性 (vyatireka) の何れによっても、因果関係は証明されないと論述して行くことである。

### III. Kamalaśīla の Dharmakīrti, Śākyabuddhi 批判(3)

#### — 推理 (anumāna) による無二知の論難 —

所取能取の二形象を欠いた無二知としての直接知覚の自己認識を真実なものとして提言する Dharmakīrti の理論からは、因果関係が証明されない、ということを経験知覚によって検証していたのが、Kamalaśīla の Dharmakīrti 批判 (1) のポイントであった。さらに因果関係の不成立を推理によって検証していたのが、Dharmakīrti 批判 (2) である。(2) では、所取能取の二形象を欠いた無二知は直接、論難の対象とはならず、むしろ、Dharmakīrti の論理学上の定説に焦点が置かれ、因果関係の不成立が論議されていた。以下では、(2) で直接、論難の対象となっていなかった点、すなわち、所取能取の二形象を欠いた無二知は、推理 (anumāna) によっても証明されず、したがって因果関係は証明されない、と結論して行く Kamalaśīla の Dharmakīrti 及び Śākyabuddhi 批判を検索する。

聖教 (Āgama) によって、「一切法無自性」(sarvadharmāṇiṣvabhāva) を証明し終て、Kamalaśīla は、以下の仏教論理学派、殊に Śākyabuddhi の提言する所取能取の二形象を欠いた自己認識としての無二知の理論を、主に論理学上の視点から検討し、論破している。

(54) Note (25)

(55) Note (26)

[A]

[Śākyabuddhi の提言]

<sup>(56...</sup>  
 生起 (utpāda) 等の区別 (vibhakti) は、[所取・能取の] 二 [形象を有] して顕現する知 (jñāna) によってこそなされるが、自己認識 (svasaṃvedana) のみによってなされるのではない。[所取能取の] 二 [形象] としての顕現も、虚偽 (alika) であるから、それ [二形象] によって、確定される本性のもの (所取・能取の二形象を有した知) もまさしく虚偽である。<sup>...56)</sup>

[Kamalaśīla の論難]

<sup>(57...</sup>  
 もし、生起等の性質を有するあらゆるもの (sarvadharmā) が、虚偽を本性とする知としての顕現によって、確定される性質のものであるなら、それ (あらゆるもの) が、どうして、勝義的なこの二 [形象] としてあろうか。

[I] <sup>(57 a...</sup> [汝の見解通りに] [所取能取の形象である] 二としての顕現も、虚偽 (alika) なものであるなら、勝義としてあり得る知の本性が、何か別なあり方であろうか。所取・能取の形象 (grāhyagrāhakākāra) を欠いた別な、真実である知は、凡夫達によって知覚されることはない。[知覚されるなら] 全ての者が、真実を見ることになろう。それ (所取・能取の二形象を欠いた無二知) は、推理 (anumāna) によっても、確定されない。そのような能証 (liṅga) が成立しないからである。というのは、まず、

[I-1] 同一性の能証 (svabhāvahetu) に基づく推理は、あり得ない。その同一性こそが、証明されなければならないからである。

(56) Māl P180b<sup>4-5</sup>, D165b<sup>6-7</sup>=PVT(Ś) 現量 P252b<sup>8</sup>-253a<sup>4</sup>, D205a<sup>2-3</sup>, Part III. p. 15 (44)~p. 23 (60) [本稿 (59) までの English Translation と Māl の Tibetan Text]

(57) Māl P180b<sup>5</sup>-181a<sup>3</sup>, D165b<sup>7</sup>-166a<sup>5</sup>, cf (46)

(57a) Māl P180b<sup>5</sup>-181a<sup>2</sup>, D166a<sup>1-4</sup>=PVT(Ś) 現量 P251a<sup>7</sup>-b<sup>4</sup>, D203b<sup>7</sup>-204a<sup>3</sup> これは、PVT(Ś) では対論者の見解として挙げられ、Śākyabuddhi は、それ以下で論難している。その一部分が (40a) PVT(Ś) 現量 [P252a<sup>6</sup>-b<sup>4</sup>, D204b<sup>3-7</sup>] の Śākyabuddhi の Dharmīn 成立説である。また、この (57a) の PVT(Ś) の対論者の見解、すなわち、Kamalaśīla の見解は、(29b) PVT(Ś) 現量 P251a<sup>9</sup>, D203b<sup>8</sup> に続くものである。(57a) から言い得ることは、Kamalaśīla は Māl で Śākyabuddhi を批判し、Śākyabuddhi は PVT(Ś) で Kamalaśīla を批判している、という事実である。なぜなら、両者のその記述は逐字的に一致しているからである。したがって、この例のみを以て断定し得ないが、双方が批判し合っている故、両者が同時代人である可能性も全くないとは言えない。

[I-2] 結果の能証 (kāryahetu) [に基づく推理] もあり得ない。〔所取・能取の形象である〕二として無なるもの (無二知) と共に何らの因果関係 (kāryakāraṇabhāva) も成立しないから。それ (二として無なるもの) は、感官の機能 (indriya) によって、把握されないからである。それ (二として無なるもの = 無二知) とは別な結果 (kārya) が存在することもない。というのは、汝の見解では、〔所取能取の形象を欠いた〕その無二〔知〕自体が、結果となるであろうとき、そのこと自体が、証明されるべき状況にあるから、それ (無二知が結果であること) も、確実な認識手段 (pramāṇa) によって、証明されない。二として顕現するもの (所取能取の形象) は〔汝の見解では〕兎の角と同様であるから、結果 (kārya) ではない。<sup>57a)</sup> そう (結果) であれば、直接知覚と非認識によって、証明されるもの、すなわち因果関係が成立しようが、勝義として、無二知 (advayajñāna) によって、いかなるものも把握されることはない。

[I-3] 非認識 (anupalabdhi) も、否定 (pratiṣedha) を証明するものであるから、〔無二知の〕実在を証明する立場にはない。<sup>57)</sup>

[B]

〔Śakyabuddhi の提言〕

<sup>58...</sup> それ (無二知) を成立させる認識手段 (pramāṇa) は存在する。というのは、<sup>58a...</sup> Aの本性と対立するBは、Aの本性を欠いている。例えば、冷たい性質と対立する暖かさは、冷たい性質を欠いているように。(大前提)

知ること (bodha) を本性とするものも、二なる本性と対立する。(小前提)

〔知ることを本性とするものは、二なる本性を欠いている (結論)〕

〔この推論〕能遍と対立するものの認識 (vyāpakaviruddhopalabdhi) である。<sup>58a)</sup> 〔この推論で〕能証の基体が成立しないこと (所依不成 āsrayāsiddha) もない。<sup>58b...</sup> 一般に、喜びと喜びでないこと等の形象を知覚する Dharmin, すなわち、知 (vijñāna) など、知ることを本性とするものは、成立するからで

(58) Māl P181a<sup>4-8</sup>, D166a<sup>5-b</sup><sup>2</sup>

(58a) PVT(Ś) P252b<sup>4-6</sup>, D204b<sup>7-205a</sup><sup>1</sup>

(58b) cf. (40a) PVT(Ś) 現量 [P252a<sup>6-b</sup><sup>4</sup>, D204b<sup>3-7</sup>] の最後、下線部分。

…58b) (58c)…  
 ある。〔無二知〕それ自体が成立しないのでもない。所取の形象(grāhyākāra)が、一・多の本性を欠いているから、無自性である故、それ(所取の形象)に依存して構想された能取の形象(grāhakākāra)も、無自性だからである。あらゆるものが、無(abhāva)となってしまうこともない。〔所取・能取の二形象は〕行為者(kartr)と行為(業karman)の性質こそに依存することだけから、例示的に表現されたもの(upalakṣaṇa)であるから、虚偽な(alika)ものにすぎず、〔知の〕本体ではない。<sup>…58c)…58)</sup>

〔Kamalaśīla の論難〕

〔I-3-1〕<sup>(59)…</sup>その〔提言〕も、不合理である。もし、一般に勝義として、二を欠くことのみを証明しようとするなら、その場合、わかりきったことを更に証明すること(siddhasādhana)に他ならない。我々も、勝義として、〔所取能取の〕二〔形象〕は、虚偽(alika)であるから、欠如している(vivikta)と述べる。

〔I-3-2〕<sup>(59a)</sup>もし、概念否定(paryudāsarūpa)の勝義の立場から、知が形象を欠いていることを証明しようとするなら、その場合も、わかりきったことを更に証明することに他ならない。我々も、勝義として、あらゆるものは、不生

(58c) これは(57a)のKamalaśīlaの提言に対するŚākyabuddhiの弁明〔PVT(Ś)現量 P251b<sup>2</sup>-252a<sup>4</sup>, D204a<sup>4</sup>-b<sup>1</sup>〕である。そのPVT(Ś)を訳出する。

「けれども、知(vijñāna)によって、外界の如くに青などとして顯現するものは、一・多の点で吟味に耐えられない故、真実ではない。したがって、まず、勝義的に知(vijñāna)に別の所取(grāhya)が存在するのではない。それ(所取)は、存在しないから、それに依存して構想された認識(bodha)の本性が、この所取にとつてのこの能取(grāhaka)の本性である、というそういう捉え方をするのは、とやうのである。行為者(kartr)と行為(karman)は、相互に依存し合う故、構想されたものであるからである。まさしくそれ故に、相互に依存し合って、その二(所取能取の形象)が確定されるからである、と述べる。認識(bodha)<sup>①</sup>の本性である自己認識のみも、能取と表現されるのではない。認識(bodha)<sup>②</sup>の本性は、相互に依存し合って、構想されたものではない。自己の因からこそ、それ(認識の本性)は、そのように生起するからである。その認識の本性こそが、自己認識のみとしてある。〔知は〕上述の所取能取を欠いているから、無二(advaya)と言う。すなわち、青や黄などが知によって、外界に存在するかのように顯現する。そのことは真実ではない。それ故に、外界は、真実ではない、と述べられる。それ(外界)に依存して、行為者(kartr)の性質を知ると主張することも、真実ではない。それ故、知覚は、無二であると確定されよう。」①、②P[252a<sup>1</sup>]はrtog paであるが、D[204a<sup>6</sup>]によりrtogs paと読む。cf. (32a)

(59) Mal P181a<sup>8</sup>-182b<sup>8</sup>, D166b<sup>2</sup>-167<sup>6</sup>

(59a) cf. SDNS IV. [II.2.B.2.1] p.58, 80

である故、あらゆる知は、勝義として無であり、勝義的な〔所取能取という〕二なる形象を欠いていると主張するからである。

[I-3-3] もし、知という主題 (Dharmin) において、二を欠いていることと、実在としての本性との両者共を証明しようとするなら、その場合、喩例 (dṛṣṭānta) において、肯定的必然関係 (anvaya 同品定有性) が成立しない故、能証はまさしく不確定 (anaikāntika) である。外界の対象の性質が、冷たさであり暖かさであるとは、勝義として成立しないからである。

[I-3-4] 単一な知 (ekajñāna) にも、知ることと顕現することの二が顕われるから、矛盾はない故、喩例は、所証 (sādhya) をも欠いている。

[I-3-5] もし、二を欠いている知が、成立するなら、自然に事物の本性も成立するであろうと考えるなら、この考えは、悪しきものである。必然的關係がないからである。この場合に、二を欠いているものに、必ず勝義的事物が実在するというこの必然的關係とは何であろうか。それと矛盾した (所取・能取の形象を有した知は、実在である) ことを拒斥する検証 (sādhya viparyaya bādhakapramāṇa) がないから、また、そのような喩例は成立しないからである。石女の息子などと、その二自体で不確定 (anaikāntika) となるからでもある。

[I-3-6] 無限遡及 (anavasthā) となろうから、二に対して別の二が存在するのではない。冷たさなどの感触を欠いた暖かさなどの性質のように、二を本性とするもの以外に、何処にか、それ (二) を欠いていると証明される、知ること (bodha) を本性とする、一般的な特徴をもった、別の Dharmin が存在するのではない。〔所取・能取〕二〔形象〕を本体とすることこそが、知 (bodha) の本性だからである。というのは、自己を照明して、別の照明 (prakāśa) に依存しないことが、知 (bodha) の特徴である。身体、地、山、河、海などの多様な形象 (citrākāra), すなわち、外界の本性として眼前に顕現するものが、自ら照明するから、知 (bodha) の本性を超えないのである。それ (多様な形象) も、虚偽 (alika) な性質の住居 [一知] で、活動するとき、自分の身体と一体となって、行為する愛人の如くに、知 (bodha)

(59b) 有形象唯識説を展開している。cf. (29a) (32c)

それ自体と抱擁するかのように行爲する故、正しくない (asat) [所取・能取の] 二 [形象] と出会うことで、この批判的 (＝無二知) が信頼されるに足るものと、どうしてなり得ようか。その本体の如きである二を本性とするもの (知) が、愛人 (＝所取能取の二形象) と別れたなら、どうして、この [知] が、別のものと出会うずに、単独で、Dharmin となるような状況は、どこにもあり得ない。それ故に、まさしく能証の基体が成立しない (所依不成 āsrayāsiddhi) のである。

[I-3-7] 經量部 (Sautrāntika) なども、勝義としては、知が二なる本性を有するとは承認しない。部分のないもの (知) に、それ (二) は矛盾するからである。それ故、それ (知) が無二を本性とすると証明しても、何が証明されたことにならうか。外界の対象も、それ (無二を本性とすること) と矛盾しないからである。

[I-3-8] もし、[無二知ではなく] 別の認識手段 (pramāṇa) によって、外界の事物を排除すると言うなら、それ (外界の事物) と同様に、知にとっても、それ (別の pramāṇa によって排除されること) が、どうして述べられないのか。

[I-3-9] 行爲者と行爲 (karmakartṛ) の関係だけに依存して構想された性質のものであるから、[所取・能取の二形象は] 虚偽な (alika) ものにすぎないと [汝によって] 言明されたことも、知覚經驗 (anubhava) と著しく矛盾する。というのは、汝が、勝義としても、知は、無二なる形象を有するのみであると主張することに対して、青などの心の多様な形象が、外界のものとして別に顕現するけれども、行爲者と行爲という表現上の特性 (viśeṣa) を知らない凡夫達によっても、分別の誤謬を離れた心に、[所取証取の二形象] ありありと顕現することが、正しく知覚される。その多様なもの (＝形象) が、[行爲者と行爲の関係に] 依存することだけから、仮説されたものなら、その (所取・能取の二形象の) 特性が、凡夫に至るまで、ありありと顕現することもなからう。

[I-3-10] もし、汝が、時間的空間的状況の確定によって区別された形象の集まりが、そのようにありありと知覚されるというそのことも、虚偽であると

認めるなら、その場合、解脱を願っている汝は、〔所取・能取の形象という〕二なる本性を欠いている知の本性すなわち、覆われている本体に対しても、離脱 (vivikta) を本性とすると執着し、熱望するが、それ以外に何があるというのか。非常に小さな隙間から出ている大きな身体をした象の尾を引き留めることと同様に、賢者達は、非常に長い間、奇妙に思っている。したがって、自ら智慧の鋭い剣で、その執着を断滅せよ。

[I-3-11] 真実 (satya) を本性とするその知 (jñāna) の本体に、どうして、そこに、〔所取・能取の二形象が〕 そのようにありありと顕現するのであろうか。〔汝の主張する〕虚偽 (alika) を本性とする諸形象 (ākāra) は、〔知との間に〕同一性 (tādātmya) と因果性 (tadutpatti) を特徴とするいかなる必然関係もない。相互に排除し合って存在することを特徴とする (paraspara-parihārasthītilakṣaṇa) 真実〔すなわち知〕と非真実〔すなわち、所取・能取の二形象〕の両者が、同一性 (tādātmya) としてあることは矛盾するし、非真実なものも、何らかのものから生起するとも、認められないからである。それ (非真実なもの) が生起するなら、これら二 (真実なる知と非真実な所取・能取の二形象) は、同時に、同一性 (tādātmya) のものとして、顕現しないであろう。原因と結果の二は、異なった時間と性質のものであるからである。〔同一性あるいは因果性という〕必然関係がなくとも、顕現すると確定することも不合理である。過大適用の過失 (atiprasaṅga) となるからである。したがって、必ず、〔汝の見解によれば〕知 (bodha) の本性と異ならない自性を有した、非真実 (asatya) を本体とする諸形象が、顕現すると認められるから、同一性 (tādātmya) を特徴とする必然関係を承認しなければならぬ。それ故に、両者 (知と所取能取の二形象) とも虚偽な (alika) ものとなる。さもなければ、どうして、虚偽な諸形象と、知 (bodha) の本性が、同一性 (tādātmya) として知覚されようか。したがって〔知は〕真実〔であると想定すること〕に対するこの執着 (abhiniveśa) という捕獲のなわを捨て置くべきである。<sup>...59)</sup>

[A] [B] の提言が Śākyabuddhi によるものであることは、Śākyabuddhi が、Pramāṇavārttika-ṭīkā [PVT(Ś)] の III. 現量章の中で、Dharmakīrti の

Pramānavārttika 同章、第212、213偈を注釈する際に言明するものと同定されるからである。この Śākyabuddhi の見解を研究された岩田孝氏は、「Śākyamati の知識論」の注で、その批判が Kamalāsīla の Māl に展開されていることを指摘された。<sup>(60)</sup>それは、Māl の内容が詳細にわたって公表されていない時期になされたもので、氏の博識によるものである。

Māl に関心のある筆者は、Śākyabuddhi のものと照合してみた結果、さらに次のようなことに気付いた。それは Kamalāsīla の一方的な批判のみではなく、Śākyabuddhi が反論者の弁として取り上げているものが、実は Kamalāsīla の言明であるということである。つまり上に示した Māl における [I] [I-1] [I-2] の Kamalāsīla の言明が、そのまま Śākyabuddhi の PVT(Ś) の中で、対論者の見解として見出される。あたかも、Śākyabuddhi と Kamalāsīla が、実際に論争したかのような形態を示している。<sup>(60a)</sup>

上記の Māl における Kamalāsīla の無二知の理論を破す方法と見解を以下にまとめておく。

所取能取の二形象を欠く無二知を「因の三相」を満し得る三種の能証すなわち、同一性の能証 (svabhāvaḥetu)、結果の能証 (kāryaḥetu) 非認識 (anupalabdhi) によって、検証し、何れによっても証明されないと導いて行く。そのポイントは、無二知によって因果関係 (kāryakāraṇabhāva) が、証明され得ないとする点にある。殊に、非認識 (anupalabdhi) による検討では、Śākyabuddhi によって提出された推論式を掲げ、その不整合性を11項目にわたって指摘していた。先の Kamalāsīla の Dharmakīrti 批判 (2) の II-4 でも、非認識 (anupalabdhi) それ自体を問題とし、それは否定 (pratiśedha) を証明するものであり、直接知覚 (pratyakṣa) を意味するもので、推理 (anumāna) ではないと批判していた。

推論式によって、無二知の存在を論証しようとする Śākyabuddhi に対する Kamalāsīla の論破の要は、[I-3-6] に見出されるように、「所取・能取の二形

(60) *Philosophia*. (1981) No. 69, p.160 (35) (36)。また松本史朗氏は特に arthakriyāsamartha を巡っての仏教論理学派と中観派との対論を Māl を資料に論じておられる。「仏教論理学派の二諦説(上)(中)(下)」南都仏教, 45, 46, 47号 (1980, 81)。

(60a) cf (57a) (58c)

象こそが知の本体であること、そしてその二形象が、他の照明 (prakāśa) に依存することなく、自ら顕現する<sup>(61)</sup> という有形象唯識説を提出することを方法として、「知のみを真とし、所取能取の形象は虚偽ではあるが、顕現する」という無形象唯識説を破するのである。これは〈Kamalaśīla の Dharmakīrti 批判 (1)〉でも採用されていた方法である。また [I-3-6] に見られる「所取能取の二形象が、他の照明 (prakāśa) に依存することなく自ら顕現する」とは Kamalaśīla が SDNS<sup>(62)</sup> でも言明するところである。

最後の [I-3-11] では、以下の点に焦点がある。知のみを真実とし、所取・能取の二形象は虚偽であるとの定説を立てる対論者すなわち仏教論理学派にとって、知の真実性が証明されるには、知において因果関係の成立が立証されなければならない。しかしながら、「所取能取の二形象は虚偽ではあるが、知に顕現する」との見解からは、知と形象との間に、必然関係つまり、同一性 (tādātmya)、因果性 (tadutpatti) の何れも成立し得ないと誘導して行くのが、Kamalaśīla の論破の焦点である。因果性 (tadutpatti) の不成立の根拠は、虚偽なもの、すなわち対論者にとって所取能取の二形象が、何かから生起するということが、そもそも言い得ないからである。他方、同一性 (tādātmya) の不成立の根拠は、虚偽なものであると規定される二形象と真実なる知とは、性質を異にするものだからである。したがって所取能取の二形象を欠いた無二知の自己認識には、因果関係 (kāryakāraṇabhāva) が成立し得ず、その無二知自体も、根拠をもたないものとなり、真実在とはなり得ないわけである。仏教論理学派の最高の真実となるもの——無二知——の理論を、同派の必然関係、すなわち同一性 (tādātmya) と因果性 (tadutpatti) の理論と照合して吟味検証し、論破するのが、Kamalaśīla の Dharmakīrti 批判の方法である。Kamalaśīla にとり、無二知の理論を論破することと、因果関係 (kāryakāraṇabhāva) の理論を破すこととは、同一の事柄の表裏なのである。そして、それが、同時に、Kamalaśīla の無自性論証の主要点でもある。

(61) (59a) (29a) (32c)

(62) (32c)

## IV. Kamalaśīla の Dharmakīrti 批判(4) : SDNS

### 和訳研究(3)の解説

— 知の自己照明 (prakāśa) 説論破 —

Kamalaśīla は *Sarvadharmāṅśvabhāvasiddhi* (SDNS) を著わすに、その冒頭で、「自、他、自他の二、無因からの生起を否定する」推論式を挙げ、順に論破の詳述を展開する。その方法が Nāgārjuna の「中論」I-1 をモデルにしている、ということは先述したところであるが<sup>(63)</sup>、さらに、Kamalaśīla は、その四種の因 (hetu) からの生起の論破に続いて、縁 (pratyaya) からの生起を論破する。この部分の訳出とテキストを示すことが第二部の目的であるが、この縁 (pratyaya) からの生起を破することも、実は Nāgārjuna が同じく、「中論」I-2 以下で展開しているところである<sup>(64)</sup>。つまり「中論」第一章は、因 (hetu) と縁 (pratyaya) からの生起を論破すること、つまり因果関係の不成立を示すことによって「一切法無自性」を証明して行くことを、その構造としている。この基軸を Kamalaśīla は、SDNS を著わすに際し、踏襲しているのである。Kamalaśīla は、Nāgārjuna の「中論」に対する註釈書を著わしてはいないが、SDNS や Māl という独立の書の中で、一切法無自性を論証するに、その方式として、Nāgārjuna の「中論」特に第一章に大きく負うているのである。ただ、Nāgārjuna は「中論」I-2 以下で、説一切有部の提唱する四縁——因縁 (hetupratyaya)、所縁縁 (ālambanapratyaya)、等無間縁 (samanantarapratyaya)、増上縁 (adhipatipratyaya) を論難の対象としているが、Kamalaśīla は、SDNS や Māl で、「縁からの生起」を論破するに、Dharmakīrti の知の自己照明 (prakāśa) [=自己認識 (svasamvedana)] の理論を論難の対象として取り挙げていると筆者は考えている。この点の検証と SDNS のその部分の解説を以下に示そう。それに先立ち、Dharmakīrti の知の自己照明 (prakāśa) の理論

(63) (5) (6)

(64) catvāraḥ pratyayā hetuś cālambanam anantaram /  
tathāivādhipateyaṃ ca pratyayo nāsti pañcamaḥ // 2  
na hi svabhāvo bhāvānām pratyayādiṣu vidyate /  
avidyamāne svabhāve parabhāvo na vidyate // iti / 3

を一瞥しておく。

知の特性とは Dharmakīrti によって次のように述べられている。

丁度、光 (prakāśa) が輝くとき、その輝くこと (照明) を本性とする故、自己自身を照らすと考えられる。そのように、知も自己を認識する。<sup>(65)</sup>

知は光の如く、照明することを本性とし、他に依存することなく、自ら輝き現われる。そして、照明するものと照明されるものの関係 (vyaṅgyavyaṅjakabhāva) というものは「燈火と瓶」などの場合のように、自ら照明するもの (= 燈火) とその照明によって照らし出されるもの (= 瓶) との間で成立するのである。<sup>(66)</sup> この点を Devendrabuddhi は、次のように解説している。

<sup>(67...)</sup>もし、照明しないことを本性とするあるものが、照明する本性の起こっている別のものによって、照らされる場合、照明するものと、照明されるものの関係が存在する。例えば、燈火と瓶とから、ある燈火が、照明を本性としない瓶を照明する、そうであれば、それ (燈火と瓶) は依存性を有している。照明と照明しないものとの依存性がある。照明されるもの、照明するものは、区別して、世間で、表現として成立している。両者とも、照明を本性とするものであるか、あるいは、両者とも、照明しないことを本性とする場合、照明するものと照明されるものという関係は認められない。<sup>...67)</sup>

燈火によって瓶が、照明される、ということは、燈火などが、瓶という知識の原因、つまり照明ということが、知識の原因であるということになる。この点を Dharmakīrti は PV の「自比量」の部分で明確に述べている。

<sup>(68...)</sup>もし、照明するもの (vyaṅjaka) と諸の種姓 (jāti) <sup>(68a)</sup> に、種姓を有する性質 (jātimattā) <sup>(68a)</sup> が認められるなら、照明する性質を具えている (prakāśaka) 燈

(65) PV 現量 329. cf. Note (13) 戸崎(下) pp.12-13  
prakāśamānas tādātmyāt svarūpasya prakāśakaḥ /  
yathā prakāśo'bhīmatas tathā dhīr ātmavedinī //

PV 現量 478~482, 戸崎(下) pp.160-163. cf. (16a)

(66) PV 現量 482, 戸崎(下) p.162.  
yathā pradīpayor dipaghaṭayos ca tadāśrayaḥ /  
vyaṅgyavyaṅjakabhāvena vyavahāraḥ pratanyate //

(67) PVP 現量 D255a<sup>7</sup>-b<sup>2</sup>

(68) PV-sv, pp.74<sup>20</sup>-75<sup>9</sup>

(68a) jāti は sāmānya を意味し、この点で jātimat と異なることについては、PV. 現量 (25), 戸崎(下) p.88 及び脚注 (63)

火 (pradīpa) などが牛という性質 (gotva) を具えている (PV. I-149)。なぜなら、AがBなる対象の知識の原因 (vijñānahetu) であるなら、AはBを照明するもの (vyañjaka) である。牛という性質などに関して、燈火なども、知識の原因である。<sup>(68b)</sup> <牛性などを照明するもの、つまり燈火などが、照明するものであるから。……牛性など照明されるものに対して、燈火などにも、知の原因性がある。……燈火など云々という言葉は、感官の機能 (indriya) や精神集中 (manasikāra) 等を含んでいる。> <sup>(68b)</sup> 光 (tejas) というものに依存して、眼に対象が知られるからである。従って、諸の燈火などが、牛性などを具えていよう。なぜなら、顯現 (vyakti) ということにとっても、知の因であることを除いて、何か別の現われ (abhivyakti) があって、それが、卓越した自性 (svabhāvātīśaya) を有した一般的なもの (sāmānya) を起こすことはあり得ないからである。もし、顯現 (abhivyakti) とは、内属性 (samavāya) である、というなら、それは次に答えよう。その (一般的なもの) が、内属することは不合理であるから。なぜなら、[一般的なもの (sāmānya) は] 顯現 (vyakti) と共に生起した内属一般 (samavāyamātra) であって、何か別な特性 (viśeṣa) ではないからである。<顯現と内属性とか<sup>(68c)</sup> らは> 以前の如く、後にも <顯現による内属性に> <sup>(68c)</sup> 知の因があることはないであろう。内属性だけから知の因があり得るなら、自己の基体に内属している別の諸のものにも、見られる性質 (dṛśyatā) があることになる。従って、<sup>(68d)</sup> <照明が、一般的な対象を> 照明する性質 (vyañjakatva) だけが、知の因 (jñānahetutā) である。また、そのこと (照明する性質) は、燈火 (pradīpa) などに関しても等しいから、まさしくそういうこと (燈火が知の因であること) になるのである。従って、一般的なものの作用 (vṛtti) は、内属性 (ādheyatā) でもないし、顯現 (vyakti) でもない。複合的なものに (anekatra)、作用はないから知の因ではない。<sup>(68)</sup>

以上の Dharmakīrti の見解から知られることは、次のように図式化出来よ

(68b) PVṬ(Ś) 自比量 D178a<sup>1-4</sup>

(68c) 同 D178b<sup>1-2</sup>

(68d) PVṬ(Ś) 自比量 D178b<sup>5</sup>

う。

vyāñjaka, (pradīpa) = jñānahetu

aneka, smānya, (jāti)<sup>(69)</sup>キjñānahetu, vyakti, avṛtti, ādheyatā (=samavāya)

このように Dharmakīrti は、照明する性質 (vyāñjaka, prakāśa) を知の原因、知の本性と考へ、したがって、あらゆる事物は、知によって、照明されるもの (vyāñgya) との理論を提唱することが知られた。

この知の照明 (prakāśa) を因として諸事物が生起する (照明される) との理論を論難しているのが、以下に紹介するところの Kamalāsīla の SDNS における「縁 (pratyaḡa) による生起」の吟味・論破なのである。それは先に示した Dharmakīrti 批判の場合と同様、その方法として、因果論の検証を基軸としている。

SDNS における Kamalāsīla の吟味のポイントは、照明するものである縁 (pratyaḡa) の作用の有効性が、知の因 (hetu) として知の成立に、どう係わるかを問うている。それは、結局、照明する作用、つまり因としての知と、それによって生起した果として知との間の因果関係 (kāryakāraṇabhāva) の成立の是非を問題としているわけである。したがって、先に検討した Dharmakīrti 批判と同様、その論難の鋒先は、因果関係の成立の有無に向けられている。それを具体的に示すならば、

諸縁からの生起を破する部分の冒頭で、まず、恒常な (nitya) 照明されるもの (知に顕現する対象) は存在しない故、照明 (prakāśa) は存在しない、と表明した後、かりに諸縁によって事物が照明される (生起する) 場合を次の四種のケースに分け、検討している。<sup>(70)</sup>

[I. II. 1] 知に顕現した事物が、広大な個別相 (svalakṣaṇa) を有する場合。

[I. II. 2] 知の顕現を妨げるものが、完全に排除されている場合。

[I. II. 3] 知の顕現は、感官の機能 (indriya) によるとする場合。

[I. II. 4] 知に顕現した事物とそれを把握する知とが同一であるとする場合。

これら四種の、知に顕現したものと、知自体との関係、状況を順に吟味検証

(69) cf. (68a)

(70) 第二部、梗概、和訳、参照。

し、諸縁による知の生起の理論、つまり Kamalaśīla によれば、照明 (prakāśa) の理論を論破するのである。すなわち、

[I. II. 1. 1] 照明するものである縁 (pratyaaya) から最初なかつた自性のものが生起するなら、知の照明 (prakāśa) の恒常性が崩れる。

[I. II. 1. 3] 後に、最初と異なつた自性のものが生起しないのなら、縁の作用は無意味となる。

[I. II. 2. 4. 2] 知が、完全な因 (hetu) を具えている場合、縁の作用は肯定的にも否定的にもあり得ない。

[I. II. 2. 4. 4] 対象が知によって知られる性質のものでないなら、元來、因は不完全である故、諸縁の照明作用に関係なく、知は生起しない。

[I. II. 2. 4. 5] 知の因が、完全に整っているなら、知は常に生起することになり、照明するものとしての縁の作用は無意味である。

[I. II. 3] 事物の顕現は、感官の機能 (indriya) によって生起するという見解を破す。

[I. II. 3. 3. 1] 顕現した事物が、自ら感官知 (indriyavijñāna) を生起し得ないなら、また

[I. II. 3. 3. 2] 顕現した事物が、知られる性質のものでないなら、知は生起しない故、感官の機能は無意味となる。

[I. II. 3. 3. 3] 顕現した事物が、自ら感官知を生起し得る場合、また

[I. II. 3. 3. 4] 顕現した事物が知られる性質のものであるなら、感官の機能は無意味となる。

[I. II. 4. 1] 顕現した事物が、自ら知られ得ないか、

[I. II. 4. 2] 知によって、知られる性質のものでないなら、知が起こっている場合でも、その知は、顕現した事物と同一ではない。

[I. II. 4. 3] 顕現した事物が、自ら知られ得る場合、あるいは

[I. II. 4. 4] 顕現した事物が、知によって知られる性質のものなら、因 (hetu) は完全 (avikala) であるから、照明するものである縁の作用は無意味となる。

以上、四種の知の生起に関する状況に焦点を当て、吟味し、Kamalaśīla は、知の照明 (prakāśa) の理論に対する論破を以下のように結論付けている。

[I. II. 5] 汝 (Dharmakīrti) の学説では、事物の種姓 (jāti) は、常に留まる<sup>(71)</sup> 故、照明 (prakāśa) と照明するもの (vyañjaka), 照明されるもの (vyañgya) [という関係] も常に留まることになり、照明 (prakāśa) などの確定は不必要である。また、照明するものである諸縁の有無にかかわらず、事物は、種姓の常に留まる特性により、常に顕現することになる。したがって、知の照明の理論は、整合したものではない。

以上、見たように、SDNS において Kamalaśīla は、「一切法無自性成就」の前半、論理 (Yukti) による検証の部分で、「因 (hetu) からの生起」の吟味・論破に続いて、「縁 (pratyaḡaya) からの生起」を主張する理論として Dharmakīrti の知の自己照明 (prakāśa) [＝自己認識 (svasaṃvedana)] の理論を取り挙げ、それを論破することにより「無自性」論証を固めているのである。

## 結 論

### —Kamalaśīla の Dharmakīrti 批判と無自性論証—

諸事物 (bhāva) は、因 (hetu) からも、縁 (pratyaḡaya) からも生起するものではないと論証すること——それは、Nāgārjuna が『中論』第一章で示すものを踏襲している——が、Kamalaśīla の無自性論証の方法である。

換言すれば、何らかの自性 (svabhāva) が成立するならば、そこには因果関係 (kāryakāraṇabhāva) の成立が不可欠となる。したがって、因果関係の理論を破ることが、何らかの自性を承認する見解を論破することなのである。この点が、Kamalaśīla の論理 (Yukti) による無自性論証の基軸なのである。因果関係の成立の妥当性を主張する見解——Kamalaśīla にとっては、論難すべき対論者の見解——を代表する有力な理論として、Kamalaśīla は、Dharmakīrti の因果論を取り上げ、論破する。その論破の方法は、外ならぬ Dharmakīrti 自身の検証方法つまり、直接知覚 (pratyaḡakṣa) と推理 (anumāna) によっている。すなわち、対論者 (Dharmakīrti) の理論を、対論者の検証方法を採用して吟味考察するのである。決して、対論者の見解を破るに、中観派の究極的

(71) Dharmakīrti 自身は、敵者は jāti を常住 (nitya) とみなしている、と述べる。戸崎(下) p. 56<sup>24</sup>—57<sup>17</sup>

真理——一切法無自性——を以ってするのではない。仏教論理学派の論理学と知識論という同一基盤に立ち対論を展開し、対論者の理論の自己矛盾を引き出すことを方法としている。

「因果関係 (kāryakāraṇabhāva) は、直接知覚 (pratyakṣa) と非認識 (anupalabdhī) によって証明される」との Dharmakīrti の理論を、直接知覚と推理との二種の確実な認識手段 (pramāṇa) による検証を通じて破している。この論難の基本形は Jñānagarbha, Śāntarakṣita に溯って見出し得る。

1. 直接知覚 (pratyakṣa) による吟味では、所取能取の形象 (grāhyagrāhakākāra) を欠いた無二知としての自己認識 (svasamvedana) が、因果関係を有するとは承認されない。その理由は、単一な知 (= 自己認識) が、因果という二契機を有し得ないからである。対論者が二形象は、迷乱 (bhrānti) によると提言するなら、その二形象を有する知は直接知覚ではあり得ない。なぜなら迷乱なき知が、直接知覚であるから、と対論者の定説を提出する。結局、Kamalaśīla は、「常に所取能取の形象を具えた知が、知覚される」と有形象唯識説によって、この場合、対論者の主張する無形象唯識説に応酬している。

2. 推理 (anumāna) による吟味では、まず三種の能証のうち、結果の能証 (kāryahetu) の場合は、すでに因果関係の成立を前提としての推理である故、能証と因果関係とが依存し合う誤謬となる。

同一性の能証 (svabhāvahetu) の場合は、能証と所証の必然関係が立証されず、また因果同時という矛盾、Dharma, Dharmin の不成立より起因する能証の三条件を満し得ない故、因果関係を立証し得る因ではない。

非認識 (anupalabdhī) に関しては、それは、直接知覚 (pratyakṣa) を意味するものであって推理 (anumāna) ではない。

肯定的必然関係 (anvaya), 否定的必然関係 (vyatireka) に関しても、例えば、遠近による知覚の鮮明・不鮮明という点で疑惑 (saṃdigdha) の余地が残り、何れにしても推理によって、因果関係は立証されない。

3. Śākyabuddhi は、能遍と対立するものの認識 (vyāpakaviruddhopalabdhī) による推理によって、知が所取能取の二形象を欠いていることの証明を試みている。この推理に対して、Kamalaśīla は、11項目の不整合性を指摘していた。

その要点は、「所取能取の二形象こそが、知の本体であり、その二形象は、他の照明（prakāśa）に依存することなく、自ら顕現する」という有形象唯識説を 1. の場合と同様展開することによって、Dharmakīrti, Śākyabuddhi の主張する無形象唯識説を破する点にある。さらに知のみが真であり、所取能取の二形象は虚偽ではあるが、顕現する、との対論者の見解からは、真なる知と虚偽なる形象との間に、必然関係である同一性（tādātmya）、因果性（tadutpatti）の何れも成立し得ないことを指摘する。

4. SDNS, Māl では「縁（pratyaya）からの生起」説として、Dharmakīrti の知の自己照明（prakāśa）〔＝自己認識〕の理論を俎上にのせ、因果関係の不成立を指摘する観点から論破している。

## 第二部 カマラシーラの *Sarvadharmāṅsvabhāvasiddhi* の和訳研究(3)\*

### 梗概 Part III

- I. II. 諸事物は諸縁 (pratyaya) から生起するものではない。…P327b<sup>1</sup>  
〔知は自ら照明するもの (prakāśa) との理論〈=自己認識説〉を論破する。〕
- I. II. 1. 顕現した事物が広大な個別相 (svalakṣaṇa) を有すると  
仮定した場合。…P327b<sup>5</sup>
- I. II. 1. 1. 広大でない自性を有するものが、滅するもので、最初な  
かった広大な自性が生起する場合。…P327b<sup>5</sup>
- I. II. 1. 2. 最初あった広大でない自性が滅しない場合。…P327b<sup>6</sup>
- I. II. 1. 3. 最初なかった広大な自性が生起しない場合。…P327b<sup>7</sup>
- I. II. 2. 顕現を妨げるものが、完全に取り除かれていると仮定し  
た場合。…P328a<sup>1</sup>
- I. II. 2. 1. 無を自性とするものに作用 (kriyā, vyāpāra) はない。…P328a<sup>1</sup>
- I. II. 2. 2. 有を自性とするものに作用はない。…P328a<sup>1</sup>
- I. II. 2. 3. 恒常なものは、障害をなし得ない。…P328a<sup>2</sup>
- I. II. 2. 4. その対象に対する知の生起を妨げることは出来ない。…P328a<sup>3</sup>
- I. II. 2. 4. 1. 照明が、対象に対する知を生起し得る場合。…P328a<sup>3</sup>
- I. II. 2. 4. 2. 対象が、その知によって知られる本性のものである場合。…P328a<sup>3</sup>
- I. II. 2. 4. 3. 対象との対応関係にある知の生起がない場合。…P328a<sup>3</sup>
- I. II. 2. 4. 4. 対象が、その知によって知られる本性のものでない場合。…P328a<sup>4</sup>

\* カマラシーラの *Sarvadharmāṅsvabhāvariddhi* の和訳研究(1), (2), [SDNS(1), (2) 参照] の続編である。今回の発表分(3)に先立ち、聖敎 (Āgama) による一切法無自性成就を内容とするものを SDNS IV [略号参照] として英文訳とテキストを発表した。この(3)は、論理 (Yukti) による証明の最終部分である。発表順序は逆になったが、この(3)は SDNS IV へと続くものである。

- I. II. 2. 4. 5. その対象に対する知が生起し得る場合。 …P328a<sup>8</sup>
- I. II. 3. 事物の顕現は感官の機能 (indriya) によると仮定した場合。 …P328b<sup>8</sup>
- I. II. 3. 1. 感官の自性となっているものが以前になくて、つくり出されたものである場合。 …P328b<sup>8</sup>
- I. II. 3. 2. 感官によってつくり出されたものが、別のものに変化する場合。 …P328b<sup>4</sup>
- I. II. 3. 3. 感官が事物の顕現をつくり出すと承認した場合。 …P328b<sup>5</sup>
- I. II. 3. 3. 1. 顕現した事物が、自ら感官知を生起し得ない場合。 …P328b<sup>6</sup>
- I. II. 3. 3. 2. 顕現した事物が、その知によって知られない性質である場合。 …P328b<sup>6</sup>
- I. II. 3. 3. 3. 顕現した事物が、自ら感官知を生起し得る場合。 …P328b<sup>7</sup>
- I. II. 3. 3. 4. 顕現した事物が、その知によって知られる性質のものである場合。 …P328b<sup>7</sup>
- I. II. 4. 顕現した対象に対して生起した知の特徴が、その対象と同一であると仮定した場合。 …P329a<sup>1</sup>
- I. II. 4. 1. 顕現した事物が、自ら知られ得ない場合。 …P329a<sup>1</sup>
- I. II. 4. 2. 顕現した事物が、知によって知られる性質のものでない場合。 …P329a<sup>2</sup>
- I. II. 4. 3. 顕現した事物が、自ら知られ得る場合。 …P329a<sup>2</sup>
- I. II. 4. 4. 顕現した事物が、その知によって知られる性質のものである場合。 …P329a<sup>3</sup>
- I. II. 5. 照明 (prakāśa) 説は、不合理である。 …P329a<sup>4</sup>
- I. II. 6. 諸事物は諸縁から生起するものではないという推論の証因は不定因 (anaikāntika) でも相違因 (viruddha) でもない。 …P329a<sup>6</sup>
- I. III. 論理に (Yukti) よる無自性論証の結論 …P329a<sup>7</sup>
- 〔以下 SDNS IV.〕 発表済
- II. 聖教 (Āgama) による無自性の証明 …P330a<sup>8</sup>

P327b<sup>1</sup>  
D284a<sup>7</sup>

*Sarvadharmāṅśvabhāvasiddhi* 和訳(3)

- (301...<sup>...301</sup>) 諸事物は、\*諸縁 (pratyaya) から生起するものではない。
- [反論]<sup>(302...)</sup> それでは、[諸事物は、何から生起するのである]か。[諸事物は]まさしく照明 (gsal ba, prakāśa) によって [顕現するのである。] それ故、証因は、不定 (anaikāntika) <sup>...302)</sup> である。
- [答論]<sup>(303...)</sup> その [論議] も、核心を突くものではない。恒常な (nitya), あらゆる事物は、否定されるから、恒常な、照明されるものは、何ら存在しない故、照明ということも否定されるからである。<sup>...303)</sup>
- また、諸縁によって、事物が顕現するなら、
- [I. II. 1] [その顕現した事物は] 広大な個別相 (svalakṣaṇa) を有するものであるのか、あるいは、
- [I. II. 2] それの [顕現を] 妨げるもの (sgrib pa, āvaraṇa) が、完全に取り除かれた状況にあるのか、あるいは、
- [I. II. 3] 感官の機能が、つくり出したものであるのか、あるいは [I. II. 4] その [顕現した] 対象に対して生起した知識 (jñāna, vijñāna) <sup>(304a)</sup> の特徴は、[その対象と] 同一であるのか、その何れかであると吟味しよう。<sup>...304)</sup>
- <sup>(305...)</sup> そこで、まず、[I. II. 1] 第一の主張は、支持されるものではない。[なぜな

\*D284b

- (301) Māl P220a<sup>2</sup> D200a<sup>1</sup>  
gañ dag yañ dños po rnams ni rkyen dag las mi skye'i / cf. MMK. I-2 以下
- (302) Māl P220a<sup>2-3</sup> D200a<sup>1</sup>  
'o na ci ze na / de dag gis gsal<sup>1</sup> bar byed pa 'ba' zig tu zad de / de'i phyir gñan tshigs ma ñes pa fiid yin no sñam du sems pa 1. P has bsal, cf. 本稿 fn. (13) (65). PV 現量329, 478-482.
- (303) Māl P220a<sup>3</sup> D200a<sup>1-2</sup>  
de yañ sñar bsal<sup>1</sup> ba spyir bsal<sup>1</sup> ba'i phyir spañs pa fiid do // 1. D has btsal
- (304) Māl P220a<sup>3-5</sup> D200a<sup>2-3</sup>  
gal te rkyen dag las dños po gsal bar 'gyur na rañ gi mtshan fiid rgyas pa'i ño bo 'am / de'i sgrib pa yañ dag par zad pa'i bdag fiid dam / dbañ po legs par byed pa'am / yul de la rnam par śes pa skye ba'i mtshan fiid gcig tu 'gyur grañ zes rnam par brtags te /
- (304a) SDNS では jñāna, Māl によれば vijñāna である。
- (305) Māl p220a<sup>5</sup> D200a<sup>3</sup>  
de la re zig phyogs dañ po ni ma yin te / rtag pa fiid ñams par thal bar

ら、] 恒常性 (nityatva) が、崩れてしまうことになるからである。<sup>305)</sup> <sup>(306...</sup> [I. II. 1] 広大でない自性を有するものが、本質的 (svarasa) に、滅するものであって、照明するものである縁 (pratyaaya) によって、最初なかった広大な個別性が生起するのであれば、その場合、そのことから、[顕現した事物は] 広大な個別相を有するものとなろう。<sup>306)</sup> <sup>(307...</sup> [I. II. 1. 2] 最初あった [広大でない] 自性が、滅しないのであれば、その場合、この [顕現した事物は] に、広大さと広大でないこととの相互に排除し合う二つの自性が、入り混じっていることが、認められよう。<sup>307)</sup> <sup>(308...</sup> [I. II. 1. 3] 最初なかった [広大な] 自性が、生起しないのなら、照明するものである縁 (pratyaaya) は、無意味なものとなろう。

[自、他、自他の二、無因からの] 諸事物の生起も、以前に詳しく論破したから、[第一の見解は] 不合理である。<sup>308)</sup> <sup>(309...</sup> [I. II. 2] 障害物が、完全に取り除かれた状況にある [という第二の主張] も支持できるものではない。<sup>309)</sup> <sup>(310...</sup> [I. II. 2. 1] 無 (P328a) を自性とする、そういったものは、非存在であるから、如何様にしても、作用 (kriyā, vyāpāra) することは、あり得ないからである。<sup>310)</sup> [I. II. 2. 2]

'gyur ba'i phyir ro //

(306) Māl P220a<sup>5-6</sup> D200a<sup>3-4</sup>

gal te rañ gi ño bo ma rgyas pa ni rañ gi ñañ gis 'jig la gsal bar byed pa'i rkyen las so // ño bo <sup>1</sup> rgyas pa gzan zig skye bar 'gyur na de'i tshe de la rañ gi mtshan ñid rgyas par 'gyur ro // 1. D has ñid

(307) Māl P220a<sup>6-7</sup> D200a<sup>4</sup>

de lta ma yin te / rañ gi ño bo sña ma ma 'gags na gcig la rgyas pa dañ ma rgyas pa phan tshun 'gal ba'i rañ bzin gñis 'chol bar khas blañs par 'gyur ro //

(308) Māl P220a<sup>7-8</sup> D200a<sup>4-5</sup>

rañ gi ño bo sñon med pa zig mi skyed na yañ gsal bar byed pa'i rkyen don med par 'gyur la / dños po rnams kyi skye ba yañ sñar rgyas par bsal ba'i phyir rigs pa ma yin pa ñid do //

(309) Māl P220a<sup>8</sup> D200a<sup>5</sup>

sgrib pa yañ dag par zad pa'i bdag ñid kyañ ma yin te /

(310) Māl P220a<sup>8-b<sup>1</sup></sup> D200a<sup>5</sup>

med pa'i ño bo de ni dños po med pa ñid kyis gañ gis kyañ byed par mi srid pa'i phyir ro //

(311) Māl P220b<sup>1</sup> D200a<sup>5-6</sup>

dños po'i ño bo la yañ bya ba sñar bsal ba'i phyir ro //

(312) only Māl P220b<sup>1-2</sup> D200a<sup>5-6</sup> (SDNS om.)

<sup>1</sup> don gzan du gyur ba zig byed pa yin na ni rkyen rnams ji ltar dños po'i gsal bar byed pa yin na don gzan du ma gyur pa ni byed par mi srid pa ñid de / de ni sñon ñid nas yod pa'i phyir ro // 1. D has de

<sup>(311…</sup>有を自性とするものについても、作用は、以前に否定し終っているからである。<sup>…311)(312)</sup>  
 [I. II. 2. 3] <sup>(313…</sup>恒常なものである自性を特性として有するものは、不滅であるか  
 不生であるかの何れかであって、[それが] 障害をなすということは全く不合理  
 である。過大適用の過失となってしまうからである。<sup>…313)</sup> [I. II. 2. 4] <sup>(314…</sup>その対象に  
 ついて、知識 (jñāna, vijñāna) が生起することを妨げるという仕方では、障害  
 をなすということも、不合理である。<sup>…314)</sup> [I. II. 2. 4. 1] <sup>(315…</sup>それ (照明すること) が、  
 [一定した関係にある] 対象に対して、知識を生起し得るのか、あるいは、  
 [I. II. 2. 4. 2] [対象は] その知識によって知られる本性のものであるのか、の  
 何れかであるとするならば、知識が、完全な (avikala) 因 (hetu) を具えてい  
 る場合、何も障害をなすことは出来ないからである。もし、<sup>…315)</sup> [I. II. 2. 4. 3] <sup>(316…</sup>この  
 [一定した対象についての知の生起が] あり得ないか、あるいは、[I. II. 2. 4.  
 4] [対象は] その知識によって知られる本性のものでないならば、そのとき、  
 もともと、因 (hetu) は、不完全であるから、その対象に対して、知は生起し  
 ない故、この [主張] は、その対象について、知が生起することを妨げるとい  
 う仕方では、障害をなすことは、不合理である。<sup>…316)</sup>  
<sup>(317…</sup>障害物が完全に取り除かれていて [なおかつ]、知の生起を妨げるというこ

(313) Māl P220b<sup>2-3</sup> D200a<sup>6-7</sup>

dños po rtag pa la ni<sup>1</sup> rañ bñin gyi khyad par 'ga' žig ma bśag pa'am / ma  
 bskyed<sup>2</sup> par sgrib par byed pa nam yañ rigs pa ma yin te / ha cañ thal bar  
 'gyur ba'i phyir ro // 1. D has / 2. P has skyed

(314) Māl P220b<sup>3</sup> D200a<sup>7</sup>

yul de la rnam par śes pa skye ba'i gags byed pa ñid kyis sgrib par byed  
 par rigs pa yañ ma yin te /

(315) Māl P220b<sup>3-4</sup> D200a<sup>7-b</sup><sup>1</sup>

de rañ gi yul rnam par śes pa skyed par nus pa'am / de'i rnam par śes pas  
 rnam par śes par bya ba'i rañ bñin žig yin na ni śes pa rgyu ma tshañ ba  
 med pa la gañ gis kyañ gags byed mi nus pa'i phyir ro //

(316) Māl P220b<sup>4-5</sup> D200b<sup>1-2</sup>

'on te 'di mi nus pa'am /<sup>1</sup> de'i rnam par śes pas rnam par śes par bya ba'i<sup>2</sup>  
 rañ bñin ma yin na ni de'i tshe bdag ñid kyis rgyu ma tshañ ba'i phyir yul  
 de la rnam par śes pa mi skye ba'i phyir 'di yul de la rnam par śes pa skye  
 ba'i gags byed pa ñid kyis sgrib par<sup>3</sup> byed par<sup>3</sup> rigs pa ma yin no // 1.  
 D om. 2. P has ba 3. P om.

(317) Māl P220b<sup>6</sup> D200b<sup>2-3</sup>

sgrib<sup>1</sup> pa yañ dag par zad pa bñin du<sup>2</sup> śes pa<sup>2</sup> skye ba la gags byed pa  
 med pa la sogs pa'i ño bo yañ byed par mi rigs pa ñid do // 1. P has bsgrib

とは、命題否定 (prasajya-rūpa) であっても、概念否定 (paryudāsa-rūpa) であっても、〔否定としての〕作用をなすことは、全く不合理なことである。それ故に、〔一定した対象についての知の生起が〕あり得ないか、あるいは、〔対象は〕その知識によって知られる本性のものでないから、照明するものである諸縁が、その〔顕現した事物〕に対して、障害をなすのとは逆の〔顕現を助ける〕状況にあってさえも、その対象に対して、知が生起することは不合理である。<sup>…317) (318…</sup>  
 [I. II. 2. 4. 5] <sup>(319…</sup>もし、〔知が生起〕し得ると承認するなら、そのとき、障害をなすものがあっても、その〔対象〕に対する〔知の〕因 (hetu) は、完全に整っているから、知が常に生起することに (P328b) なる故、諸の照明するもの〔としての縁〕の作用は、無意味である。そうであれば、諸の恒常なものに対して、何も作用しないから、いかなるものも、障害をなすということは不合理である。

諸の無常なものに関しては、知が生起し得ない別な瞬間がある故、因 (hetu) の特性を有するものだけが、ある時に、障害をなすのであって、<sup>…319)</sup>別な仕方では〔原因としての特性をもたないものが障害をなすの〕ではない。

[I. II. 3] 〔事物の顕現は〕<sup>(320…</sup>感官の機能 (indriya) がつくりなすという主張も支

2. D om.

(318) Mal P220b<sup>6-7</sup> D200b<sup>8</sup>

de ñid kyi phyir mi nus pa'i phyir ram / de'i rnam par śes pas rnam par śes  
 par bya ba'i rañ bñin ma yin pa'i phyir gsal bar byed pa'i rkyen dag ni <sup>1</sup> de  
 la sgrib par byed pa bzlog <sup>2</sup> tu zin kyañ / yul de la rnam par śes pa skye  
 bar rigs pa ma yin pa ñid do // 1. P has gi 2. D has zlog

(319) Mal P220b<sup>7-221a<sup>2</sup></sup> D200b<sup>8-5</sup>

ci <sup>1</sup> ste nus par khas len na ni <sup>2</sup> de'i tshe sgrib par byed pa yod kyañ de la  
 rgyu ma tshañ ba med pa'i phyir rnam par śes pa rtag tu skye bar 'gyur bas  
 gsal bar byed pa rnams kyi byed pa don med pa yin no // de lta bas na rtag  
 pa rnams la cuñ zad kyañ mi byed pa'i phyir 'ga' yañ sgrib par byed par  
 rigs pa ma yin gyi / mi rtag pa rnams la <sup>3</sup> ni rgyu'i khyad par kho na res  
 'ga' žig rnam par śes pa skyed <sup>4</sup> par mi nus pa'i skad cig ma gžan skyed  
 pa ñid kyi sgrib par byed pa yin pa'i phyir ro // 1. D' has ji 2. D has /  
 3. D om. 4. D has bskyed

(320) Mal P221a<sup>2-4</sup> D200b<sup>5-7</sup>

dbañ po legs par byed pa źes bya ba'i phyogs kyañ ma yin te / legs par  
 byed pa de'i rañ gi ño bor gyur pa žig byed na ni mi rtag pa ñid du thal  
 bar 'gyur te. / sña ma bñin no // legs par byed pa don gžan du gyur pa žig  
 byed na ni de legs par byed par rigs pa ma yin te / de la cuñ zad kyañ mi

持されるものではない。[I. II. 3. 1] その〔感官の〕自性となっているものが、以前にはなかったものであって、つくり出されたものなら、〔その自性は〕無常なものとなってしまつて、先の場合と同様である。[I. II. 3. 2] つくり出されたものが、別のものに変化するなら、その〔感官〕が、つくり出すというのは、不合理である。その〔無常なもの〕に対して何も働きかけないからである。そうでなければ、過大適用の過失 (atiprasaṅga) となろう。いかなる事物に〔対して〕も、何も作用し得ない、ということも、以前に証明し終つて<sup>320)</sup>いる。

[I. II. 3. 3] <sup>(321...</sup>感官が、つくり出すと認めたとしても、もし顕現した事物自体が、[I. II. 3. 3. 1] 自ら、感官による知 (indriyavijñāna) を生起し得ないか、あるいは、[I. II. 3. 3. 2] その対象に対する知によって、知られる性質のものでないなら、その場合、その〔顕現した事物〕に対して、知は生起しないであろうから、〔感官の機能が〕つくり出すことは、全く無意味なこととなろう。<sup>321)</sup>

[I. II. 3. 3. 3] <sup>(322...</sup>もし〔顕現したその事物の本体が、自ら、感官による知を生起〕し得るか、あるいは、[I. II. 3. 3. 4] 〔顕現した事物に対する〕その知によって、知られる性質のものであるなら、その場合、感官が、つくり出す前に、その〔対象〕に対して、知が生起することになってしまうから、〔感官が〕つくり出すことは、全く無意味となろう。<sup>322)</sup>

<sup>(323...</sup>まさしく、それ故に (P329a) [I. II. 4] その〔顕現した〕対象に対する知の生

byed pa'i phyir ro / de lta ma yin na ni ha cañ thal bar 'gyur ro // dños po gañ la gañ gis kyañ cuñ zad kyañ byed par mi srid ces kyañ<sup>1</sup> sñar bstan zin to // 1. Dom.

(321) Māl P221a<sup>4-6</sup> D200b<sup>7</sup>-201a<sup>1</sup>

dbañ po legs par yin du chug kyañ gal te gsal bar bya ba'i bdag ñid kyī dños po de bdag<sup>1</sup> ñid kyis // dbañ po de'i rnam par śes pa bskyed par mi nus pa'am / de'i rnam par śes pas rnam par śes par bya ba'i rañ bzin zig ma yin na ni de'i tshe de la rnam par śes pa skye bar mi 'gyur ba ñid pas legs par byed pa don med pa kho nar 'gyur ro // 1. D had dag

(322) Māl P221a<sup>6-7</sup> D201a<sup>1-2</sup>

'on te nus pa'am / <sup>1</sup> de'i rnam par śes pas rnam par śes par bya ba'i rañ bzin zig<sup>2</sup> yin na ni de'i tshe dbañ po legs par byed pa'i sñon rol tu<sup>3</sup> yañ de la rnam par śes pa skye bar thal bas de legs par byed pa don med pa ñid do // 1. D om. 2. P om. 3. D has du

(323) Māl P221a<sup>7-b</sup><sup>1</sup> D201a<sup>2-3</sup>

de ñid kyī phyir yul de la rnam par śes pa skye ba'i mtshan ñid kyañ ma yin te / 'di ltar gal te gsal bar bya ba'i dños po de bdag ñid kyis mi nus

起が〔対象と同じ〕特徴を有する、ということも不合理である。というのは、  
 [I. II. 4. 1] もし、その顕現した事物が、自ら〔知られ〕得ないか、あるいは、  
 [I. II. 4. 2] その〔対象に対する〕知によって、知られる性質のものでないなら、その場合、その〔顕現した事物の〕知が、生起したとしても、その知は、  
 その対象と同一ではないことになろう。<sup>…323)</sup>

[I. II. 4. 3] <sup>(324…</sup>もし〔その顕現した事物が、自ら〔知られ〕得るか、あるいは、  
 [I. II. 4. 4] その〔対象に対する〕知によって、知られる性質のものであるなら、その場合、その本性の如く、因 (hetu) は完全 (avikala) である故、知は、常に近接しているので、諸の照明するものである〔縁 (pratyaya)〕が、知を生起させるのではない。<sup>…324)</sup>

[I. II. 5] <sup>(325…</sup>また、汝らの学説 (naya) によると、あらゆる事物の種姓 (jāti) は、常に留まることを本性としている故、照明 (prakāśa) と諸の照明するもの (vyañjaka) [である縁] と照明されるもの (vyañgya) も、常に留まるから、照明 (prakāśa) などということを確認することは、不合理である。照明するものである諸〔縁〕も、何ら働きかけることはないから、あらゆる事物は、常に顕現することになってしまう〔という誤謬〕も避け難い。<sup>…325)</sup> そうであるならば、

pa'am / de'i rnam par śes pas rnam par śes par bya ba'i rañ b'zin ma yin na  
 ni de'i tshe rnam par śes pa de bskyed kyañ / de ni de'i yul ñid du mi 'gyur  
 ro //

(324) Māl P221b<sup>1-2</sup> D201a<sup>3-4</sup>

'on te nus pa'am / <sup>1</sup> de'i rnam par śes pas rnam par śes par bya ba'i rañ b'zin  
 yin na ni de'i tshe de'i rañ gi no bo b'zig tu de yod pa tsam gyis rnam par  
 śes pa 'byuñ ba'i phyir rtag tu ñe.ba kho na yin pas gsal <sup>2</sup> bar byed pa  
 rnam rnam par śes pa skyed <sup>3</sup> par byed pa ma yin no // 1. D om. 2. P  
 has bsal 3. P has bskyed

(325) Māl P221b<sup>2-5</sup> D201a<sup>4-5</sup>

g'zan yañ khyed kyi lugs kyis dños po'i rigs thams cad rtag tu gnas pa'i ño  
 bo ñid yin pas gsal ba dañ / gsal bar byed pa dañ / gsal bar bya ba yañ  
 dus thams cad du <sup>1</sup> gnas pa'i gsal ba la sogs par rnam par <sup>2…</sup>b'zag pa<sup>…2</sup> rigs  
 pa ma yin te / gsal bar byed pa rnam cuñ zad kyañ mi byed pa'i phyir ro //  
<sup>3…</sup>dños po thams cad dus thams cad du gsal bar bya ba yañ dus thams cad  
 du gnas pa'i phyir gsal ba la sogs par rnam par b'zag pa rigs pa ma yin te /  
 gsal bar byed pa rnam cuñ zad kyañ mi byed pa'i phyir ro<sup>…3</sup> // dños po  
 thams cad dus thams cad du gsal ba la sogs par thal ba yañ bzlog dka' ste /  
 1. P has gsal bar 2. D has g'zag par 3. Only Māl P has the sentences.  
 [SDNS om.]

この照明 (prakāśa) 説は、正しいものではない。

[I. II. 6] <sup>(326...</sup>〔諸事物は、照明するものである諸縁から生起するものではないという推論式の〕証因が、同品に存在する (sapakṣe sattvam) から、不定 (anaikāntika) 因でもないし、相違 (viruddha) 因でもない。[I. III] <sup>...326)</sup>それ故に、最高の真実として、あらゆる事物は、常に自性をもたないものである。というこのことが、証明されるのである。

[I. III] まさにそれ故に、世尊は『稲竿經』の中で、諸事物は、自、他、自他の二、無原因〔から生起すること〕を否定している。すなわち、「名、色の芽は、自ら (svayam) によって、作られたものではない。(P329b) 他のものによって、作られたものでもない。自他の二によって、作られたものでもない。自在天 (Īśvara) によって、化作されたものでもない。時間によって、変えら

(326) cf Māl P221b<sup>5</sup>-222a<sup>1</sup> D201a<sup>5</sup>-b<sup>1</sup>

rtag tu rgyu ma tshañ ba med pa'i phyir ro // gžan yañ gsal ba ni dños po  
rtag pa kho na la kun brtags pa yin na rtag pa zés bya ba yañ nus pa thams  
cad kyis stoñ pa'i phyir dños por mi 'thad pa ñid pas des gtan tshigs ma  
ñes pa ñid lta ga la yin / 'di ltar gañ žig nus pa thams cad kyis stoñ pa de  
ni dños po med pa yin te / dper na mo gśam gyi bu la sogs pa lta bu ste /  
dbañ phyug la sogs pa rtag par 'dod pa mtha' dag kyañ de bžin no // de<sup>1</sup>  
rim dañ cig car dag gis don byed par 'gal ba'i phyir nus pa thams cad kyis  
stoñ pa ñid du sñar bstan zin to // de'i phyir rigs mthun pa la srid pas gtan  
tshigs 'di ma grub pa ñid kyañ ma yin la / 'gal ba ñid kyañ ma yin no //  
mo gśam gyi bu la sogs pa yañ dños po ñid du thal bar 'gyur ba'i phyir ma  
ñes pa ñid kyañ ma yin no // 1. D has yañ

〈(325)最後〉あらゆる事物が常に顕現することになってしまふという誤謬も避け難い) 常に、原因は完全であるからである。また、照明 (prakāśa) とは、まさしく常住な事物について、構想されたもの (parikalpita) であるなら、常住 (nitya) というのも、あらゆる効力 (sāmarthya) を欠いたものであるから、〔常住なものが〕事物であることは、あり得ない故、それ故、不定 (anaikāntika) 因と、おおしてなろうか。

あらゆる効力を欠いているものは、非事物である。例えば、石女の息子 (vandhyāputra) などのように。(必然性)

自在天 (Īśvara) などの、あらゆる常住であると言われるものも、同様 (効力を欠くもの) である。(所属性)

〔自在天などの、あらゆる常住であると言われるものも、非事物である。(結論)〕それ (常住なもの) が、継続的及び同時的に (kramayaugapadyam) 効果的作用 (arthakriyā) をなすということは、矛盾するからである。(常住なものは) あらゆる効力 (sāmarthya) を欠くものであると以前に論じ終っている。それ故に、同品 (sapakṣa) にあり得るから、この能証 (hetu) は、不成立 (asiddha) でもないし、相違 (viruddha) でもない。〔効力を欠くものが、事物であるなら〕石女の息子なども、実在となってしまうから、不定 (anaikāntika) でもない。

れたものでもない。単一な縁に依存するのでもない。無原因から生起するのでもない」云々とある如し。

他の人々（反論者）が、「この御言葉は、作用を否定するためだけにおっしゃられた」のであると言う、その彼らにとって、そう述べることも不合理である。最高の真実としては (paramārthatas), いかなる事物も不生だからである。

もし、最高の真実として、なんらかのものが生起するということが成立するなら、その場合、この賢者の言葉と別様にあるのではない。まさしくそれ故に、龍樹 (Nāgārjuna) 足下も、最高の真実として、生起を否定するために、

「いかなる事物も、どんな場合であっても、決してそれ自身から、他のものから、自他の二から、また原因なくして、生起したのではない」

と説かれている。

従って、「最高の真実として、あらゆるものは、まさしく不生である」ということは、道理に適ったことである。

『聖法集経』に、次のように「その不生ということが、真実なことであって、(生等の) 他のもは真実なものではない」と説かれるように。この不生と

(327) Śālistambasūtram P Vol. 34. No. 876. 128b<sup>6-7</sup>

miñ dañ gzugs kyi myu gu de yañ bdag gis ma byas / g'zan gyis ma byas / gn̄is kas ma byas / dbañ phyug gis ma byas / dus kyis ma bsgyur / rañ b'zin las ma byuñ / byed pa la rag las pa ma yin / rgyu med pa las kyan ma skyes te /

Prasp. p. 567<sup>2-4</sup>

sa ca nāmarūpānkuro no svayāmkṛto na parakṛto nobhayakṛto neśvarakṛto na kālapariṇāmīto no prakṛtisambhūto no caikakāraṇādhīno nāpy ahetusamutpannaḥ /

⊙16, 825<sup>17-20</sup>

彼名色芽。亦非自作。亦非他作。亦自他俱作。

非自在化。亦非時變。非自性生。非假作者。

亦非無因而生。

cf. Bhk I p. 512<sup>7-8</sup>

iyam ca yuktir bhagavato'bhīpretā śālistambādau / svataḥ parata ubhābhyām ahetos ca janmaṣedhāt /

(328) MMK ch. I-1

na svato nāpi parato na dvābhyām nāpy ahetutaḥ / utpannā jñātu vidyante bhāvāḥ kvacana ke cana //

(329) cf. 大正⑦ No. 761, p. 647c<sup>2-3</sup>

證諸法不生名為證実諦。隨何法證於實諦。

Bhk I p. 509<sup>5-7</sup>

いうことも、最高の真実として、真理に相応しいから、最高の真実といわれる。というのは、生などという否定されるべきものは、何も成立しないから、無なる対象に対して、無は機能しないから、不生などと把握することは、戯論 (prapañca) にすぎない。〔それは〕表象のみ (vijñaptimātra) などと分別するようなものである。最高の真実として、真如 (tattva) は、不生などと表現されるべきものではない。(P330a) まさしくそれ故に、聖文殊師利 (Mañjuśrīkumārabhūta) によって、真如が尋ねられたとき、聖 Vimarakīrti は、黙して語らなかつた<sup>(330)</sup>。『聖如来智印三昧経』にも「菩提の核心に入って唯一の真実が、確定されることさえ、知見しない。いわんや四諦<sup>(331)</sup>をや。」と説かれている。

このように、まず、論理 (Yukti) によって、「あらゆる事物は、まさしく自性をもたない (niḥsvabhāva) ものである」ということが、論証されたのである。

---

yathoktam Āryadharmasamgītau / “anupādaḥ satyam asatyam anye dharmaḥ” iti

Mal. P161a<sup>7</sup> D149a<sup>1</sup>

de skad du 'phags pa chos yañ dag par sdud pa las / mi skye ba ni bden no // skye ba la sogs pa cho g'zan ni mi bden te / brdzun pa slu ba'i chos can no 'zes gsuñs so //

BhKI. p.509<sup>7-9</sup> [先の部分に続く]

etac ca paramāṛthānukūlatvād anupādaḥ satyam iti uktam / paramāṛthatas tu notpādo nāpy anupādaḥ / tasya sarvavyavahārātītatvāt /

(330) 維摩経 ed. by Jisshu Oshika, *Acta Indrogica* I, Naritasan Shinshoji, 1970 p. 211<sup>32-36</sup>

De nas 'Jam dpal g'zon nur gyur pas Lid tsa bī Dri ma med par grags pa la 'di skad ces smras so: “Kho bo cag gis ni rañ rañ gi bstan pa bśad zin na, rigs kyi bu, khyod kyañ gñis su med pa'i chos kyi sgo bstan pa la spods par gyis śig.” De nas Lid tsa bī Dri ma med par grags pa cañ mi smra bar gyur to.

(331) P. Vol. 32, No. 799 Āryatathāgatajñānamudrāsamadhināmamahāyānasūtra 273b<sup>7-8</sup>

byañ chub sñiñ por 'dug nas bden gcig kyañ // grub par ma mthoñ bzi ltag la śig /

P327b<sup>1</sup>  
D284a<sup>7</sup>  
C281a<sup>6</sup>  
N314a<sup>8</sup>

**Tibetan Text of the *Sarvadharmāṇiḥsvabhāvasiddhi*  
of Kamalaśīla (3)**

- \*D284b gañ dag dños po \* rnam s rkyen dag las skye ba ni ma yin no //  
(101... 101)  
(102) 'o na ci ze na / gsal ba kho nas to / des na gtan tshigs ma ñes pa  
(103) kho na'o sñam du sems pa de yañ sñiñ po ma yin pa ñid de /  
(104) dños po rtag pa thams cad bsal ba ñid kyi phyir gsal bar bya ba  
(105) rtag pa ci yañ med pas gsal ba yañ bsal ba'i phyir ro //  
(106) (107... 107)
- °C281b gžan ° yañ rkyen rnam s kyi dños po gsal ba žig yin na / ci ste  
(108) [I. II. 1] rañ gi mtshan ñid rgyas par 'gyur ba'am / [I. II. 2] de'i  
sgrib pa yañ dag par zad pa'i bdag ñid dam / [I. II. 3] dbañ po  
legs par sbañs pa'am / [I. II. 4] yul de la šes pa skye ba'i mtshan  
ñid gcig yin grañ žes rnam par brtag ste /  
de la re žig [I. II. 1] phyogs dañ po ni ma yin te / rtag pa ñid  
(109... 109) ñams par thal bar 'gyur ba'i phyir ro // gal te rañ gi ño bo ma  
rgyas pa ni rañ gi ñañ gis 'jig pa yin la gsal bar byed pa'i rkyen  
gyis sñon med pa'i rañ gi ño bo rgyas pa žig skye na ni de'i  
tshe de las rañ gi mtshan ñid rgyas par 'gyur ro // de lta ma yin  
(110... 110) te / rañ gi ño bo sña ma 'gag par mi 'gyur na ni de'i tshe 'di  
la rgyas pa dañ ma rgyas pa phan tshun 'gal ba'i rañ gi ño bo  
(111) gñis 'chol bar khas blañs par 'gyur ro // rañ gi ño bo sñon med  
(112) pa žig mi skye na ni gsal bar byed pa'i rkyen don med par 'gyur  
(113... 113) ro // dños po rnam s kyi skye ba yañ sñar rgyas \*\* par gsal ba'i  
(114... 114) phyir rigs pa ma yin no //  
(115... 115)
- \*\*N314b [I. II. 2] sgrib pa yañ dag par zad pa yañ ma yin te / [I. II. 2. 1]  
P328a med (P) pa'i ño bo de ni dños po med pa ñid kyi s gañ gis kyañ  
(116... 116) bya bar mi srid pa'i phyir ro // [I. II. 2. 2] bya ba dños po'i ño  
(117) bo yañ sñar bsal zin pa'i phyir ro // [I. II. 2. 3] 'ga' žig gis rtag  
(118... 118)

|   |                |                |
|---|----------------|----------------|
| (101) yino N  | (102) PN om.   | (103) / PN     |
| (104) gsal DC   | (105) bsal PN  | (106) gsal DC  |
| (107) phyiro N  | (108) kyi DC   | (109) phyiro N |
| (110) 'gyuro N  | (111) PN om.   | (112) 'thol P  |
| (113) 'gyuro N  | (114) 'gyuro N | (115) yino N   |
| (116) phyiro N  |                |                |
| (117) Read <i>bsal</i> instead of <i>gsal</i> according to the Māl [P220a <sup>8</sup> , D200a <sup>6</sup> ] |                |                |
| (118) phyiro N  |                |                |

pa'i dños po'i rañ bñin khyad par can 'ga' žig ma bñig pa'am /  
 ma skyed par ni nam yañ sgrib par byed par rigs pa ma yin te /  
 ha cañ thal bar 'gyur ba'i phyir ro // [I. II. 2. 4] yul de la śes pa  
 skye ba'i gegs byed pa ñid kyis sgrib par byed pa yin par yañ  
 rigs pa ma yin te / [I. II. 2. 4. 1] de rañ gi yul la śes pa skyed  
 par nus pa'am / [I. II. 2. 4. 2] de'i rnam par śes pas rnam par śes  
 par bya ba'i rañ bñin yin pa dañ / śes pa rgyu ma tshañ ba med  
 pa la sus kyañ bgegs by a bar mi nus pa'i phyir ro // ci ste  
 \*D285a [I. II. 2. 4. 3] 'di \* mi nus pa'am [I. II. 2. 4. 4] de'i rnam par śes  
 pas rnam par śes par bya ba'i rañ bñin ma yin na ni de'i tshe  
 bdag ñid kyis rgyu ma tshañ bas yul de la rnam par śes pa mi  
 skye ba'i phyir 'di ni yul de la śes pa skye ba'i gegs byed pa ñid  
 kyis sgrib par byed pa yin par rigs pa ma yin no // sgrib pa yañ  
 dag par zad pa bñin du śes pa skye ba'i bgegs med pa dañ ma  
 °C282a yin pa'i ° no bo yañ bya bar rigs pa ma yin pa kho na'o // de  
 bas na mi nus pa'i phyir ram / de'i rnam par śes pas rnam par  
 śes par bya ba'i rañ bñin ma yin pa'i phyir gsal bar byed pa'i  
 rkyen rnams kyis de la sgrib par byed la bzlog kyañ yul de la  
 rnam par śes pa skye bar rigs pa ma yin no // [I. II. 2. 4. 5] 'on  
 te nus par khas len na ni de'i tshe sgrib par byed pa yod du zin  
 kyañ de la rgyu ma tshañ ba med pa'i phyir rnam par śes pa  
 P328b rtag tu skye bar (P) 'gyur bas gsal bar byed pa rnams kyi byed  
 pa don med pa yin no // de lta bas na rtag pa rnams la cuñ zad  
 kyañ mi byed pa'i phyir 'ga' yañ sgrib par byed pa yin par rigs  
 \*\*N315a pa ma yin no // mi rtag pa rnams la ni rnam par \*\* śes pa skyed  
 mi nus pa'i skad cig ma gžan skyed pa ñid kyis rgyu'i khyad par  
 kho na res 'ga' žig sgrib par byed pa yin par 'gyur gyi / gžan  
 du ni ma yin no //

(119) P om. (120) bskyed DC (121) phyiro N  
 (122) lus DC  
 (123) Read thus instead of *rnam par śes pa'i* according to the Māl [P220b<sup>4</sup>, D200b<sup>1</sup>]  
 (124) pa'añ DC (125) kyi PN (126) PN om.  
 (127) / C (128) yino N  
 (129) Read *kyi* instead of *kyis* according to the Māl [P220b<sup>3</sup>, D200b<sup>4</sup>]  
 (130) chuñ D (131) bskyed PN (132) DC om.

- [I. II. 3] dbañ po legs par bya zes bya ba'i phyogs kyañ ma yin te / [I. II. 3. 1] de'i rañ gi ño bor gyur pa sñon med pa zig legs par byed pa yin dañ / mi rtag pa ñid du thal bar 'gyur te sña ma bzin no // [I. II. 3. 2] legs par bya ba don gzan du gyur pa zig byed na ni / de legs par byed par rigs pa ma yin te / de la cuñ zad kyañ mi byed pa'i phyir ro // de lta ma yin na ha cañ thal bar 'gyur ro // gañ gis kyañ dnos po 'ga' yañ byed par mi srid de zes kyañ sñar bsgrubs zin to // [I. II. 3. 3] dbañ po legs par byed pa yin du chug na yañ gal te gsal bar bya ba'i dnos po'i bdag ñid de / [I. II. 3. 3. 1] bdag ñid dbañ po'i rnam par ses pa skye bar mi nus pa'am / [I. II. 3. 3. 2] yul de'i rnam par ses pas rnam par ses par bya ba'i rañ bzin ma yin na ni / de'i tshe de la rnam par ses pa skye bar mi 'gyur ba kho na bas legs par byed pa don med pa kho nar 'gyur ro // [I. II. 3. 3. 3] ci ste nus pa'am [I. II. 3. 3. 4] de'i rnam par ses pas rnam par \*ses par bya ba'i rañ bzin zig yin na ni de'i tshe de yañ dbañ po legs par bya ba'i sñon rol tu de la ses pa skye bar thal bar 'gyur ° ba'i phyir legs par bya ba don med pa kho nar 'gyur ro //
- \*D285b de ñid kyi phyir (P)  
[I. II. 4] yul de la ses pa'i skye ba'i mtshen ñid can du yañ rigs pa ma yin te / 'di ltar [I. II. 4. 1] gal te gsal bar bya ba'i dnos po de bdag ñid kyis mi nus pa'am / [I. II. 4. 2] de'i rnam par ses pas rnam par ses par bya ba'i rañ bzin ma yin na ni de'i tshe rnam par ses pa de skyes su zin kyañ de'i rnam par ses pa de'i yul ñid ma yin par 'gyur ro //
- [I. II. 4. 3] 'on te nus pa'am [I. II. 4. 4] de'i rnam par ses pas rnam par ses par bya ba'i rañ \*\* bzin zig yin na ni de'i tshe de'i
- \*\*N315b

(133) na P (134) PN om. (135) DC om.

(136) phyiro N (137) bsgrubs PC (138) dbañ P

(139) DC om. (140) 'gyuro N

(140a) legs par bya ba ni PDNC, but om. it according to the Māl [P221a<sup>7</sup>, D201a<sup>8</sup>]

(141) pa D (142) dag P (143) P om.

(144) PDCN om. But read thus according to the Māl [P221a<sup>8</sup>, D201a<sup>8</sup>]

(145) pa'an DC

(146) pa'i PDCN. Read thus according to the Māl [P221b<sup>1</sup>, D201a<sup>8</sup>]

(147) PDCN om. Read thus according to the Māl [P221b<sup>1</sup>, D201a<sup>8</sup>]

rañ gi ño bo bžin du rgyu ma tshad ba med pa'i phyir rnam par  
 śes pa rtag tu ñe ba kho na yin pas gsal bar byed pa rnams rnam  
 par śes pa skyed par byed pa ma yin no // <sup>(148)</sup>  
<sup>(149.....149)</sup>

[I. II. 5] gžan yañ khyed cag gi lugs kyis dños po'i rigs thams  
 cad rtag tu gnas pa'i ño bo ñid yin pas gsal ba dañ gsal bar byed  
 pa rnams dañ <sup>(150)</sup> gsal bar bya ba yañ rtag tu gnas pa'i phyir gsal  
 ba la sogs pa rnam par <sup>(151)</sup> gžag pa rigs pa ma yin no // <sup>(152... ..152)</sup> gsal bar  
 byed pa rnams kyañ cuñ zad kyañ mi byed pa'i phyir dños po  
 thams cad rtag tu gsal bar thal bar 'gyur ba yañ bzlog dka'o // <sup>(154... ..154)</sup>  
 de lta bas na gsal bar smra ba 'di ni bzañ po ma yin no // [I. II. 6]  
 mthun pa'i phyogs la yod pa'i phyir gtan tshigs ma ñes pa ñid  
 kyañ ma yin la / 'gal ba ñid kyañ ma yin te / de'i phyir don  
 dam par dños po thams cad rtag tu rañ bžin med do źes bya ba  
 'di 'grub po //

de ñid kyi phyir bcom ldan 'das kyis sa' lu ljañ pa'i mdo las /  
 dños po rnams rañ dañ gžan dañ gñi ga dañ rgyu med pa can  
 du bkag ste / ji skad du miñ dañ gzugs kyi myu gu de ni rañ  
 ñid kyi kyañ ma (P) byas / gžan gyis kyañ ma byas / gñi gas  
 kyañ ma byas / dbañ phyug gis kyañ ma sprul / dus kyis ma  
 bsgyur / rkyen gcig pu la rag las pa ma yin / rgyu med pa las  
 skyes pa yañ ma yin no / źes bya ba la sogs pa lta bu'o // gžan  
 dag na re bka' 'di ni byed pa dgag pa lhur mdzad pa yin no źes  
<sup>(156)</sup>  
<sup>(157)</sup>  
<sup>(158... ..158)</sup>

P329b

°C283a

\*D286a

\*\*N316a

zer ba de dag gi ° de yañ rigs pa ma yin te / don dam par dños  
 po 'ga' yañ skye ba med pa'i phyir \* ro // gal te don dam par  
 'ga' žig skye bar grub na ni / de'i tshe bśad pa 'di bzañ gi gžan  
 du ni ma yin no // de ñid kyi phyir <sup>(160)</sup> 'phags pa Klu sgrub kyi źal  
<sup>(161... ..161)</sup> <sup>(162)</sup>  
 śna nas kyañ / don dam skye ba dgag pa'i phyir / bdag las ma  
 yin gžan las min // gñis las ma yin rgyu med min // dños po gañ  
 dag gañ \*\* na yañ // skye ba nam yañ yod ma yin // źes gsuñs  
 so // de lta bas na don dam par na chos thams cad skye ba med

|                 |              |                    |
|-----------------|--------------|--------------------|
| (148) PN have / | (149) yino N | (150) PN have /    |
| (151) bžag PN   | (152) yino N | (153) chuñ DC      |
| (154) yino N    | (155) medo N | (156) DC have kyañ |
| (157) DC om.    | (158) yino N | (159) phyiro N     |
| (160) DC om.    | (161) yino N | (162) P om.        |

pa kho nar rigs te / 'phags pa *chos yañ dag par sdud* pa las /  
 ji skad du / skye ba med pa de ni bden gyi / chos *g'zan* ni yod  
 pa ma yin no <sup>(165)</sup> *žes gsuñs* pa lta bu'o // skye ba med pa 'di yañ  
 don dam par rtogs pa dañ mthun pa'i phyir don dam pa *žes* bya  
 ste / 'di ltar skye ba la sogs pa dgag par bya ba ci yañ ma  
 grub pa'i phyir yul med pa la med pa mi sbyor ba'i phyir skye  
 ba med pa la sogs par 'dzin pa spros pa kho na yin te / rnam  
 par rig pa tsam ñid la sogs par rnam par rtog pa *b'zin* no // don  
 dam par ni de kho na ñid skye ba med pa la sogs par brjod par  
 P330a bya ba ma (P) yin te / de ñid kyi phyir 'phags pa 'jam dpal *g'zon*  
 nur gyur pas de kho na ñid dris pa dañ / 'phags pa dri ma med  
 par grags pas cañ mi <sup>(167)</sup> *gsuñ* bar gyur to // 'phags pa *de b'zin g'segs*  
*pa'i ye šes phyang rgya'i tiñ ne 'dzin gyi mdo* las kyañ / byañ  
 chub kyi <sup>(168)</sup> *sñiñ* po la *žugs* nas bden pa gcig kyañ grub pa ma  
 mthon na <sup>(169)</sup> *b'zi* lta ci smos *žes* gsuñs so // de ltar re *žig* rigs pas  
 dños po thams cad gcig tu rañ *b'zin* med pa ñid du bsgrubs pa  
 yin no //

全ての訳文と理解は、筆者の責任であるが、かつて一郷正道、御牧克己、佐々木恵精各  
 先生に *Māl* の読解につき指導を受け得ましたことを感謝致します。

1986. 11. 5.

(163) bsdud PN

(164) PN om.

(165) C has //

(166) rjod C

(167) pa PN

(168) b'zugs DC

(169) mthon C